

鹿児島における若年層の生活文化調査（第3報）

大学生の生活状況と文化に関する意識と 実態調査のクロス集計結果

Investigation of the Life and Culture of Youth in Kagoshima (3)

— Investigation of Actuality and Consciousness on University Student Life by Cross Tables —

西迫貴美代・坂上ちえ子

NISHIZAKO Kimiyo・SAKAGAMI Chieko

Abstract

The purpose of this paper is to investigate the actual condition and the consciousness on the student life. In this investigation a questionnaire survey was conducted on 369 youth students of university and college in Kagoshima, and the data obtained were analyzed by using cross tables which consist of six different factors (i.e. sex, age, birthplace, style of residence, feeling of satisfaction against the life style, feeling of satisfaction against the life style as a university or a college student). The results are briefly summarized as follows: First factor- sex: There were many differences in the results of this survey between male students and female students. Second factor- age: It became clear that elder students in this survey more recognized really image of their adolescence than younger students. Third factor- birthplace: There were some discrepancies in subjects with regard to the consciousness on living that was caused from different birthplace. Fourth factor- style of residence: A style of residence on students gave a great influence on many of answers to this questionnaire survey. Fifth factor- feeling of satisfaction against the life style: The 116 subjects who maintain good personal relationship satisfied with many of other events in their living. Sixth factor- feeling of satisfaction against the life style as a university or a college student: Many students participated in this survey were satisfied with human relationships in student life.

1. はじめに

今から5、6年ほど前は少年による凶悪犯罪が多発し、10代の若者に対するネガティブなイメージが社会を覆っていた。そこで、マスコミなどによって伝えられる若者像が正確であるのかを検証するため、1999年に若年層の生活と文化に関する調査プロジェクトを立ち上げた。1999年から2001年の3年間は、中学生を取り巻く諸問題について調査と研

究を重ね、2002年からはそれらの成果を踏まえて、鹿児島に在住する大学生の生活に関する実態や意識についての調査研究を開始した。2003年には、調査者の勤務する公立短期大学と男子学生が多く通う国立大学の理系学部の大学生を対象に、消費を含む生活状況と身体、文化に関する実態と意識について質問紙による調査を行った。その調査結果については、本学「地域研究所年報」第35号¹⁾において報告している。前報では、個々の質問項目ごとに回答を集計する単純集計を行い、多岐にわたった質問項目別に対象とする大学生の特徴を把握することができた。今回はクロス集計を行い、単純集計で明らかになった調査対象とした大学生の回答内容の違いが、どのような要因(質問項目)によって説明されるかについて解析を行う。性別、年齢、出身地、居住方法の4項目は、基本属性として質問した項目であるが、前報での単純集計結果を考察した際、いくつかの質問に対する回答にこれら4項目による影響が示唆された。また近年、大学生の学業重視志向²⁾や、大学生の充実感や自己評価が学業での達成感と高い相関を示すとする結果³⁾が注目されている。この調査でも、それぞれ4つのカテゴリーに分類した生活に対する満足感、大学生活に対する満足感についての質問ともクロスさせ、学業や生活への満足感が大学生に及ぼす影響も検討する。今回クロスさせる質問項目は、上記の理由で、性別、年齢、出身地、居住方法、生活に対する満足感、大学生活に対する満足感の6項目を選定した。本報告では、クロス集計によって、回答内容を説明すると考えられる要因を捉え、前報では明らかにできなかった大学生を取り巻く背景や環境を浮上させたいと考える。

2. 研究方法

(1) 調査方法

調査方法には、留め置き自記式による質問紙調査法を用いた。調査は、2003年11月から12月にかけて行い、対象者は、鹿児島にある国立大学の理系の学部と、調査者が勤務する公立短期大学に在学する学生とした。調査対象大学の選定理由、調査票配布数、回収率は前報に示した通りである。

(2) 調査項目

調査項目についても、詳細は前報に示した通りであるため、本報では、以下に簡潔に列記する。

「基本属性」－所属学部、性別、年齢、出身地、居住方法、親からもらう小遣い額、1ヶ月のアルバイト額、父親の年齢、母親の年齢

「生活」－生活時間、生活に対する満足感、学業の目的、大学生活に対する満足感、アルバイト、友人関係、生活の不安、親子関係、食生活

「身体」－健康への留意、身体感覚、心身の状態

「文化」－余暇、雑誌と新聞の購読、スポーツと観戦、嗜好品の利用状況

「消費」－月平均の支出額、所有物、購入の判断基準、臨時収入の使い方、貯蓄実態、金銭感覚

「意識」－価値、将来の見通し、人生目標、自己評価、自己像とその根拠、労働観、就業意識、規範意識、生活志向、日本に対する認識、生きがい、地域への愛着、余暇観、社会観、結婚観、配偶者に対する考え方

(3) 解析方法

前報では、調査対象者を全体、国立大学理系学部、公立短大に分類し、上記の調査項目に対する回答結果をそれぞれ集計した。本報では、前報の単純集計では明らかにできなかった対象者の特性を検討するために、既に集計した、「生活」、「身体」、「文化」、「消費」、「意識」の各調査項目の結果と、「性別」、「年齢」、「出身地」、「居住方法」、「生活に対する満足感」、「大学生活に対する満足感」の6項目に対する回答の間でクロス集計を行った。その結果、つまり、クロス集計を行うために分類された上記6項目の対象者集団が、各質問項目に対して回答した比率の差については5%の危険率で検定を行った。具体的には、理論的な標本特定値の差(D)と実際の標本特定値の差(d)を算出して検定した⁴⁾。「性別」、「年齢」、「出身地」、「居住方法」、「生活に対する満足感」、「大学生活に対する満足感」の6項目とのクロス集計結果のうち、検定により統計的に有意差が認められ、かつ、顕著な差が見られた結果については、クロスさせる6項目が回答内容の違いを説明できる説明要因であると捉えて分析し、単純集計では隠れていた対象者の特徴や背景を明らかにした。なお本報では、クロス集計の検定結果表を中心に提示する。クロス集計によって明らかになった比較結果については、適宜、図と文章説明で補う。

3. 結果と考察

(1) 性が説明要因と考えられる結果

1) 生活に関して

今回の調査では、全対象者369名のうち、男子学生が200名、女子学生が169名であった。まず、男女間で各質問に対する回答率を比較し、検定を行った。性別によって回答率の差を説明できるとみなされる結果について、以下に報告する。

性別による回答差が見られた生活時間については、表1に示す。生活時間については、平日の「睡眠」、「勉強」、「TV・ビデオ視聴」、「新聞・読書」、「インターネット使用」、「友人との交流」時間を尋ねたが、有意な男女差が現れたのは、「睡眠時間」、「TV・ビデオ視聴時間」、「友人との交流時間」だけであった。睡眠時間が、「5時間以上6時間未満」と答えたのは男子学

表1 生活時間－男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性 (n=200) (n=169)		
	D	d(%)	SD
睡眠時間			
1. ～4時間	5.05	3.27	
2. ～5時間	7.51	1.12	
3. ～6時間	10.13	13.50	*
4. ～7時間	8.55	-8.72	*
5. 7時間～	6.70	-9.16	*
TV・ビデオ視聴時間			
1. 0時間	4.04	3.13	
2. ～1時間	8.98	11.97	*
3. ～2時間	9.65	-5.09	
4. ～3時間	8.40	0.20	
5. ～5時間	5.68	-6.33	*
6. 5時間～	4.85	-2.10	
友人などとの交流時間 (サークル活動も含む)			
1. 0時間	7.01	-11.03	*
2. ～1時間	9.32	-4.95	
3. ～2時間	9.19	11.11	*
4. ～3時間	6.44	6.31	
5. 3時間～	7.13	4.17	

D: 理論的な標本特性値の差

d: 実際の標本特性値の差

SD: significance difference

*: $p < 0.05$

－表1～表11 共通

生に多く、「6時間以上」眠るのは女子学生が多かった。TV・ビデオの視聴時間も、「1時間以内」と答えたのは男子学生に多く、「3時間以上5時間未満」と答えた割合は、男子学生より女子学生の方が有意に高かった。友人との交流時間は、「0時間」では女子学生が、「1時間以上2時間未満」では男子学生の方が有意に多かった。大学生の生活時間については様々な機関によって調査されているが、前報で示した通り、大学生協の調査結果⁵⁾では、睡眠時間の全国平均は男女とも6.8時間であった。今回調査の結果では、男子学生より女子学生の方が睡眠時間が長かった。また、女子学生は友人との交流時間よりTVを見る時間が長く、男子学生はその逆で、TVを見る時間が少なく友人との交流時間に毎日一定の時間を割いている点で男女の差が現れた。

生活に対する満足感は、「物質面」、「心の面」、「環境面」、「対人面」に分けて質問した。クロス集計の検定結果は、表2に示す。生活の「安全や快適さなどの環境面」で、女子学

表2 生活に対する満足感—
男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
1. 衣・食・住における物質面			
a. 満足	9.57	-8.19	
b. やや満足	9.65	-8.37	
c. どちらでもない	7.24	0.80	
d. やや不満	7.35	8.35	*
e. 不満	4.29	7.41	*
2. 趣味、生きる目標などの心の面			
a. 満足	7.56	4.89	
b. やや満足	9.53	-5.91	
c. どちらでもない	8.89	-1.54	
d. やや不満	8.16	0.47	
e. 不満	5.24	2.08	
3. 安全、快適さなどの環境面			
a. 満足	9.21	-11.32	*
b. やや満足	9.78	0.59	
c. どちらでもない	8.44	12.71	*
d. やや不満	6.83	-3.79	
e. 不満	2.98	1.82	
4. 友人、親子関係などの対人面			
a. 満足	9.51	-7.50	
b. やや満足	10.03	6.91	
c. どちらでもない	7.85	2.43	
d. やや不満	5.84	-2.06	
e. 不満	2.79	0.22	

生の「満足」しているという回答以外は、男女間において有意で顕著な差は見られなかった。

学業の目的について男女間の検定結果は、表3に示す。学業の目的として、女子学生では、「幅広い知識や教養」が1位に挙げたのに対し、男子学生は4位であった。逆に、男子学生では、「深い専門知識」が

表3 学業の目的—
男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
1. 深い専門知識	6.64	9.99	*
2. 幅広い知識や教養	8.28	-15.49	*
3. 理論的な理解力や分析力	2.59	0.82	
4. 人と異なる独創性や創造性	6.08	2.72	
5. 実社会で役に立つ技術や知識	8.51	0.61	
6. ものの見方や考え方	7.61	-4.43	
7. 資格取得のための知識	5.05	-1.10	
8. 卒業証書	3.91	4.82	*
9. とくに考えたことはない	4.17	0.36	
10. その他	3.16	2.32	

2番目に回答が多かったのに対し、女子学生では5位となり、これら2つの選択肢で有意差が現れた(図1参照)。

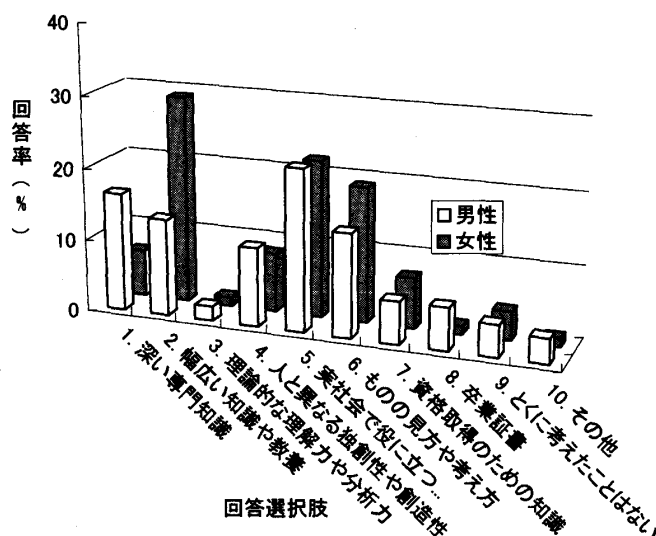


図1 学業の目的—男女別クロス集計結果

大学での「学業全般」、「対人関係」、「施設」、「所属大学の学生であること」に対する満足感について男女間でクロス集計を行った。その検定結果は、表4の通りである。生活に対する満足感と同様、男女で顕著な差は見られず、「大学での友人、対人関係」に「満足」しているのは女子学生で、「やや満足」しているのは男子学生であるという点で有意差が認められただけであった。

表4 大学生活に対する満足感—
男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
1. 大学の講義など学業全般			
a. 満足	3.91	-0.64	
b. やや満足	9.13	-0.81	
c. どちらでもない	9.73	-4.19	
d. やや不満	8.98	1.06	
e. 不満	5.60	5.17	
2. 大学での友人、対人関係			
a. 満足	9.61	-11.55	*
b. やや満足	9.69	13.37	*
c. どちらでもない	8.66	0.42	
d. やや不満	5.68	0.22	
e. 不満	2.12	-1.28	
3. 大学の施設面			
a. 満足	7.13	-3.48	
b. やや満足	9.85	5.86	
c. どちらでもない	9.75	1.77	
d. やや不満	6.44	-3.52	
e. 不満	3.78	-0.05	
4. 所属大学の学生であること			
a. 満足	8.79	-8.49	
b. やや満足	9.16	-5.77	
c. どちらでもない	9.82	13.60	*
d. やや不満	5.84	0.12	
e. 不満	3.48	1.13	

前報に示した通り、今回調査の対象者の6割近くがアルバイトを経験しており、男子学生で54.0%、女子学生で62.1%と男女差はなかった。アルバイトの目的について回答結果の男女差を検定した結果は、表5に示す。1位の結果に有意差が認められ、男子学生では、「生活費の補充」、女子学生では、「服や欲しいものを購入するため」となり、その差も顕著であった。調査者は、アルバ

表5 アルバイトの目的—
男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
1. 服や欲しいものを購入するため	9.37	-11.59	*
2. 外食や普段の小遣いのため	7.29	-1.98	
3. 生活費補充のため	7.07	10.22	*
4. レジャーや旅行の資金作りのため	3.78	-3.33	
5. 社会勉強のため	5.05	-5.47	*
6. 将来に備えて技術や資格を得るため	2.12	0.91	
7. 異性や同性の友人を得るため	1.06	-0.59	
8. 大学の空き時間を埋めるため	1.84	1.50	
9. などなく	3.48	2.22	
10. その他	4.29	-0.23	

イトの目的を他の要因によって説明されることはないと予想し、実際、年齢、出身地、居住方法などの他項目によるクロス集計では、有意差が認められなかった。現在では、アルバイトも大学生生活の一部となり、その行為と目的が問題にされることは少なくなったが、文部科学省の学校生活調査を始めとして、学生のアルバイトについては今も調査研究の対象になっている。岩田によれば、1950年代と60年代ではアルバイトの目的が分断されたという。50年代は「パンのため」、60年代は「小遣い稼ぎのため」のアルバイトで、とくに60年代後半は消費文化を満喫するためのアルバイトであったという⁶⁾。今回の結果では、男子学生が前者、女子学生が後者にあたり、女子学生の方が豊かな生活のためのアルバイトであることが明らかになった。

6つのカテゴリーに分け、友人関係について尋ねた項目の検定結果は、表6の通りであ

表6 友人関係—男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
1. 立ち入った付き合いは避けている			
a. はい	6.70	8.31	*
b. いいえ	10.23	-11.58	*
c. どちらでもない	9.73	2.36	
2. 相手に嫌われないように気をつけている			
a. はい	10.04	-7.88	
b. いいえ	9.27	9.33	*
c. どちらでもない	9.39	-2.36	
3. 携帯やメールで頻繁に連絡しあう			
a. はい	9.29	-6.54	
b. いいえ	9.78	3.86	
c. どちらでもない	9.75	1.77	
4. 学校で会って話をする			
a. はい	7.98	-8.30	*
b. いいえ	6.00	2.22	
c. どちらでもない	5.68	5.67	*
5. よく休日に買い物や遊びに行く			
a. はい	9.46	-4.14	
b. いいえ	9.59	9.78	*
c. どちらでもない	9.80	-6.55	
6. 互いの家に行って話をする			
a. はい	10.00	21.19	*
b. いいえ	9.65	-18.20	*
c. どちらでもない	9.01	-3.90	

る。回答差が10%を超えたのは3つの結果のみで、顕著な男女差ではなかったが、5つのカテゴリーで有意差が認められた。具体的には、男子学生は、「立ち入った付き合いは避けている」が、「互いの家に行って話をする」ことは多い。また、「相手に嫌われないように気をつける」ことに心を砕くことはない。それに対し、女子学生は、「立ち入った付き合い」はするが、「互いの家に行って話をする」ことはせず、「学校で会って話をする」という結果となった。青年期の友人関係に関する我が国の研究では、児童期までの友人関係は「大勢の中の一人」としての関係であったのが、青年期を迎える頃には「特定の一人」との間に親密な関係を求めるようになることが強調されているという⁷⁾。今回のクロス集計によって、友人関係に対する男女学生の相違が示されたが、確認した詳細から、男子学生では互いの家に行って話をする一方で、女子学生では立ち入った付き合いをすることで、友

人関係の発達段階を踏んでいるのではないかと思われる。今回の対象者の年齢はその過渡期にあり、友人との親密な関係を築くアプローチに男女差が現れたと考えられる。

生活の中で不安に感じることにについて複数回答で尋ね、男女の回答差を検定した結果は、表7の通りである。7つの回答で有意差が認められ、男女で異なる不安があった。男子学

表7 生活の不安(複数回答)－
男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
1. 自分の問題			
a. 健康	8.16	15.76	*
b. 性格	9.24	-5.36	
c. 能力	10.16	-7.93	
d. 宗教	—	—	—
e. その他	3.78	-2.23	
2. 家庭			
a. 家族	8.73	2.51	
b. 経済	9.85	17.87	*
c. その他	2.12	0.91	
3. 交友			
a. 恋愛	10.12	8.13	
b. その他	5.92	-5.93	
4. 学校生活			
a. 勉強	9.63	12.14	*
b. 学費	6.44	10.67	*
c. その他	3.33	-1.55	
5. 時事問題			
a. 政治	7.71	9.67	*
b. 戦争	9.77	-11.92	*
c. 青少年問題	5.24	-1.19	
d. その他	4.04	2.04	
6. 将来問題			
a. 職業	8.76	-12.84	*
b. 結婚	6.00	-2.15	
c. 経済	7.89	7.30	
d. 家庭生活	3.78	-0.05	
e. その他	2.59	-0.28	

生では、「自分の問題－健康」、「家庭－経済」、「学校生活－勉強」、「学校生活－学費」、「時事問題－政治」に、女子学生は、「時事問題－戦争」、「将来－職業」に不安を感じているという結果が示された。それに対し、「自分の問題－性格」、「自分の問題－能力」、「家庭－家族」、「交友－恋愛」、「将来問題－結婚」については、男女の差なく不安を感じる割合が高かった。この生活の中の不安についての質問は、若い世代を対象に1961年に行われた調査結果と比較するために設問した。詳細は前報に示したが、今回の対象者全体では、将来の職業と大学での勉強に不安を感じる割合がそれぞれ7割以上を占めた。40年前の調査では大学での勉強とともに、その当時の社会を背景として政治や将来の結婚にも高い不安が集まった。前報では調査した年代間での相関に注目したため、男女差は少ないと予想したが、実際にクロス集計を行った結果、7つの選択肢で男女差が現れた。とくに男子学生に多くの項目で不安が見られた。後述するが、年齢、出身地、居住方法によっても異なる結果が現れている。

親との会話の頻度を男女で比較、検定した結果は、表8の通りである。会話の内容を「学

表8 親との会話—男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
1. 勉学や進学など学校生活について			
a. よくする	9.42	-20.42	*
b. 時々する	10.19	2.21	
c. あまりしない	7.71	7.48	
c. 全くしない	4.95	9.32	*
2. 健康のことについて			
a. よくする	7.75	-10.58	*
b. 時々する	9.51	0.14	
c. あまりしない	9.71	0.77	
c. 全くしない	7.45	8.26	*
3. 友人と異性関係について			
a. よくする	7.24	-14.49	*
b. 時々する	9.21	-11.32	*
c. あまりしない	9.91	3.50	
c. 全くしない	7.94	20.90	*
4. 家庭、家庭外での日常生活について			
a. よくする	9.69	-27.02	*
b. 時々する	10.04	11.77	*
c. あまりしない	7.98	3.93	
c. 全くしない	4.85	9.91	*
5. 事件、事故など社会・時事問題について			
a. よくする	7.61	-13.17	*
b. 時々する	9.57	-16.92	*
c. あまりしない	9.29	10.92	*
c. 全くしない	8.32	17.76	*
6. 芸能、スポーツなどの話題について			
a. よくする	8.16	-9.35	*
b. 時々する	9.73	-7.46	
c. あまりしない	8.92	0.06	
c. 全くしない	8.03	15.35	*

校生活」、「健康」、「友人、異性関係」、「日常生活」、「社会、時事問題」、「芸能、スポーツ」の6つに分類して質問した結果であるが、全ての内容において、「よく（話を）する」と答えた割合が、男子学生より女子学生の方が有意に高かった。逆に、「全く（話を）しない」割合は、男子学生の方が高かった。また、いずれもその差が顕著であった。

親から言われたことについて尋ね男女間で検定した結果を、表9に示す。8つの具体的な内容について質問したが、うち4つの内容で男女の回答に有意差が認められた。「我慢して努力し続けること」、「他人の迷惑にならないこと」、「人と物事に対して平等であること」を親から「全く言われなかった」女子学生は、10%以下であったのに対し、「全く言われなかった」男子学生は、女子学生の3倍近くいた。また、「明るく朗らかであること」を「よく言われた」と回答した女子学生は、35.5%を占め、男子学

表9 親から言われたこと—男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
2. 我慢して努力し続けること			
a. よく言われた	9.04	-6.68	
b. 時々言われた	9.16	-6.86	
c. あまり言われなかった	9.24	-2.09	
d. 全く言われなかった	7.51	14.22	*
4. 他人の迷惑にならないこと			
a. よく言われた	10.15	-9.52	
b. 時々言われた	8.92	-4.31	
c. あまり言われなかった	8.48	4.47	
d. 全く言われなかった	5.42	7.45	*
5. 人や物事に対して平等であること			
a. よく言われた	9.07	-2.90	
b. 時々言われた	9.32	-4.95	
c. あまり言われなかった	9.39	-3.45	
d. 全く言われなかった	6.70	9.40	*
8. 明るく朗らかであること			
a. よく言われた	8.98	-17.50	*
b. 時々言われた	9.21	-2.59	
c. あまり言われなかった	9.44	11.74	*
d. 全く言われなかった	6.89	5.44	

生との回答比率の差は17.5%と大きかった。ジェンダー問題で話題に挙げられることの一つに、期待される行動パターンが男女によって異なるというものがある。今回の調査対象者の親世代においては、女は明るく朗らかであることが日常生活や対人関係において重要で、逆に男はニコニコと笑っていても信用を無くしかねないと考えられており、それとともに親から子へ伝わっていくジェンダー観の世代間伝達が垣間見えた。

平日の朝食、夕食を誰と食べるかについて質問したクロス集計の検定結果は、表10であ

表10 食風景(平日)－ 男女別クロス集計の検定結果				
平日の朝食	男性／女性		SD	
	(n=200)	(n=169)		
	D	d(%)		
1. 家族全員	6.50	-3.02		
2. ひとり	9.89	-6.27		
3. 友人	2.37	0.32		
4. 食べない	7.66	13.53	*	
5. その他	5.24	-5.56	*	
平日の夕食	男性／女性		SD	
	(n=200)	(n=169)		
	D	d(%)		
1. 家族全員	9.10	-22.05	*	
2. ひとり	10.23	18.13	*	
3. 友人	6.50	6.81	*	
4. 食べない	1.50	-0.09		
5. その他	6.76	-3.20		

る。朝食については、男女とも60%以上が一人で食べるかと答えていたが、男子学生の2割以上が「食べない」と答え、女子学生の回答との間に有意差が見られた。夕食については、女子学生の39.1%が、「家族全員」と答え、男子学生では、56.0%が「ひとり」、14.5%が「友人」と回答し、男女差が著しかった(図2参照)。

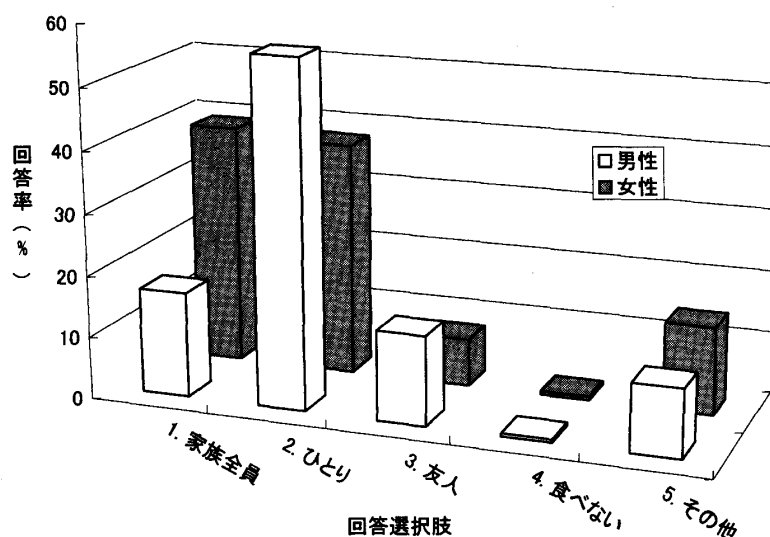


図2 食風景(平日の夕食)－男女別のクロス集計結果

食事の準備に関しても、平日の朝食と夕食について尋ねた。その回答の検定結果は、表11に示す。前述の食風景についての結果と同様、回答に顕著な男女差が見られた。平日の

表11 食生活(平日)－
男女別クロス集計の検定結果

平日の朝食	男性／女性 (n=200) (n=169)		
	D	d(%)	SD
1. 自分で作る	9.29	-1.09	
2. 家族が作る	9.88	-19.34	*
3. 家族と分担して作る	2.79	-1.96	
4. 食べない	8.12	18.53	*
5. 外食	1.50	1.00	
6. 弁当など出来合いを多用	5.68	0.22	
7. その他	3.63	1.63	

平日の夕食	男性／女性 (n=200) (n=169)		
	D	d(%)	SD
1. 自分で作る	9.39	12.92	*
2. 家族が作る	9.96	-20.70	*
3. 家族と分担して作る	4.95	-8.15	
4. 食べない	1.06	-0.59	
5. 外食	5.42	4.17	
6. 弁当など出来合いを多用	6.50	10.08	*
7. その他	4.64	1.27	

朝食では、女子学生の47.3%が「家族が作る」と回答したのに対し、男子学生では、「自分で作る」、「家族が作る」、「食べない」が並べて28%の回答を得た。平日の夕食では、「自分で作る」と回答した男子学生は36.0%、女子学生は23.1%、また、「家族が作る」と回答した女子学生は49.7%、男子学生では29.0%と有意な差が現れた。さらに、「弁当などの出来合いを多用する」とした男子学生は16.0%で、女子学生より10%以上多くいた(図3参照)。

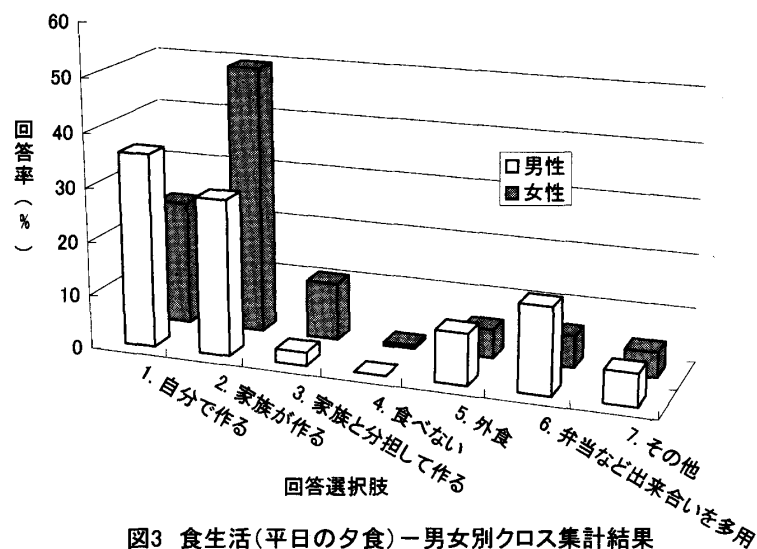


図3 食生活(平日の夕食)－男女別クロス集計結果

2) 身体に関して

5つの具体的内容を質問し、健康に対する留意の程度を量った結果を男女別に検定して、表12に示す。「健康に気を使うか」、「健康保持のために何かしているか」、「できるだけ体を動かすようにしているか」の3つの質問で、有意な男女差が見られた。男女ともに、「健康に気を使う」、「やや気を使う」と回答した割合は70%を超えたが、全く「気を使わない」と回答した男子学生は女子学生より多かった。「健康保持のために何かしている」割合は男子学生の方が、「あまりしていない」割合は女子学生の方が高く、17%の差があった。「で

きるだけ体を動かすようにしている」割合も男子学生の方が高く、女子学生は「あまりしていない」と回答する者が多かった。前報では調査者全体の単純集計結果から、高齢者と同様大学生も自分の健康には関心が高いが、具体的な方策を講じるほどの高さではない。つまり、特定できる体の不調を感じて健康に関心を向けているのではなく、体に不具合が生じないための予防に近い関心であると考察した。今回のクロス集計結果では、予想外の男女差が見られた。女子学生の方が健康に気を使い、健康保持のために何かしたり、できるだけ体を動かしたりしていると予想していたが、実際には、女子学生は健康に気を使うだけで何もせず、男子学生は健康に気を使わないのに何かしらの行動を起こしていた。この結果は、次に示すボディイメージとも関わるのではないかと考える。

体つきの自己認識について尋ねたクロス集計の検定結果は、表13の通りである。「太っているのでやせたい」と答えた女子学生は67.5%もあり、男子学生との差は約35%と、顕著な有意差が現れた。男子学生では同様に、「やせているのでこのままでよい」、「やせているので太りたい」と考えている者も多く、女子学生とは身体に対する自己認識が異なっていた(図4参照)。今回の調査では、実

表12 健康への留意—
男女別クロス集計の検定結果

	男性/女性	
	(n=200)	(n=169)
	D	d(%) SD
1. 健康に気を使うか		
a. はい	8.79	2.42
b. やや	10.24	-7.44
c. あまり	7.94	-3.12
d. いいえ	4.95	7.13 *
2. 健康保持のために何かしているか		
a. はい	6.37	7.99 *
b. やや	9.29	6.56
c. あまり	10.20	-17.03 *
d. いいえ	7.07	1.48
3. できるだけ体を動かすようにしている		
a. はい	8.40	12.21 *
b. やや	9.55	-1.04
c. あまり	9.91	-10.70 *
d. いいえ	5.68	-0.88
5. 栄養のバランスには気を使うか		
a. はい	6.15	-2.24
b. やや	10.13	-2.88
c. あまり	9.82	-3.87
d. いいえ	6.30	8.58 *

D: 理論的な標本特性値の差

d: 実際の標本特性値の差

SD: significance difference

*: $p < 0.05$

—表12～表14 共通

表13 身体感覚—男女別クロス集計の検定結果

	男性/女性	
	(n=200)	(n=169)
	D	d(%) SD
1. 太っているがこのままでよい	3.91	1.54
2. 太っているのでやせたい	10.24	-34.96 *
3. やせているがこのままでよい	7.80	10.67 *
4. やせているので太りたい	6.70	20.32 *
5. やせているがもっとやせたい	0.00	0.00
6. その他	7.71	2.02

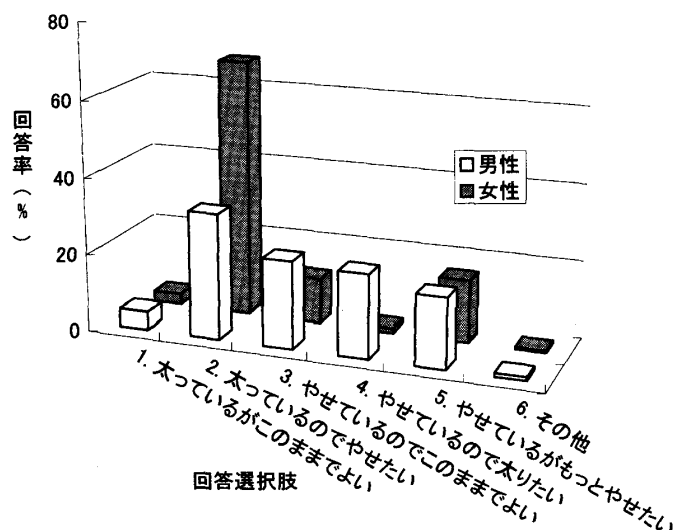


図4 身体感覚—男女別クロス集計結果

際の身長と体重の記入も同時に行ったので、そこからBMI (Body Mass Index) を算出し男女で比較したが、男女とも多くが正常域に属していた。男子学生で多少BMI値が低い者がいたが、体つきの状態と認識はさほど離れていなかった。ボディイメージ (身体像) と実際の体のサイズ (実際の外観) が極端に異なることをボディイメージに関する認知障害と言われている⁸⁾が、今回調査の対象者では極端な結果は見当たらなかった。しかし、体に対する自己認識は男女で異なり、女子学生では実際の体とそれに対する認識が一致していなかった。前述した女子学生が関心を寄せる健康の焦点も、内臓疾患等ではなく体つきを維持するための美容に関する健康ではないかと推察される。ボディイメージに関する認知のズレに従って、誤った健康 (痩身) 法を取り入れるに至ると言われるが、気にしている割には具体的な対応をしていないという結果から、今回の調査対象者の中には該当する病的な事例は少ないと思われる。この問題は、日本固有のものではない。コールマンとヘンドリー (Coleman and Hendry, 2003) の研究によれば、体格と身体のイメージは多くの青年にとって大きな関心事で、身体的魅力の重要性は、男子よりも女子の方が大きいとしている。その理由として、多くの文化において、身体的魅力の重要性が女性役割や自己概念の重要な部分をなしているためだと述べている⁹⁾。さらに、女子は対人関係から自分たちの相対的位置付けを評価し、その評価と判断によって、客観性からは外れた魅力的だと思いつけている容姿を、自分自身の役割の中心に据えるとしている。ボディイメージの捉え方にはメディアとの関連も指摘されている⁸⁾ので、他のクロス集計結果と併せて後述する。

表14 心身の状態－
男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
1. 寝不足になる			
a. よくある	10.05	-0.83	
b. 時々ある	9.95	1.72	
c. あまりない	7.29	-3.07	
d. 全くない	4.74	0.67	
2. なんとなく体がだるい			
a. よくある	9.75	-2.59	
b. 時々ある	10.18	4.99	
c. あまりない	7.56	-4.93	
d. 全くない	3.78	1.04	
3. 何かする気力がない			
a. よくある	8.69	7.47	
b. 時々ある	10.22	-7.89	
c. あまりない	8.76	-0.26	
d. 全くない	4.41	-0.83	
4. 責任のあることに関わりたくない			
a. よくある	8.03	14.26	*
b. 時々ある	10.15	-13.89	*
c. あまりない	9.24	-7.54	
d. 全くない	5.68	5.67	
5. イライラする			
a. よくある	7.35	-2.57	
b. 時々ある	10.01	-17.61	*
c. あまりない	9.77	6.64	
d. 全くない	6.00	12.04	*

心身の状態について5項目を挙げて質問し、男女間で検定した結果を、表14に示す。3項目については、男女で回答差がなかった。「責任あることに関わりたくない」と考える頻度は、「よくある」か「時々ある」かで、有意な男女差が現れたが、「ある」という点では大きな違いはないと考えられる。「イライラする」ことが「全くない」と回答した割合では、男女差が見られ、男子学生の方が高かった。

3) 文化に関して

余暇の過ごし方についての複数回答のクロス集計検定結果は、表15の通りである。11の回答選択肢中、5つで有意差が認められた。男子学生は、余暇に「パソコンをする」、「スポーツをする」、「サークル活動をする」割合が女子学生に比べ有意に高く、女子学生は、「テレビ(ビデオ、ラジオを含む)を見る」、「雑用をする」割合が有意に高かった。前報で注目した、「友人と話をする」、「ぼーっとする」と答えた割合は男女とも高く、とくに女子学生では40%を超えた。有意差

は認められず、男女に共通する余暇行動であることが示された。余暇の過ごし方の現状について様々な年代を対象にした調査結果¹⁰⁾では、すべての世代において、好きなこと、休息、友人・家族、知識、運動、社会活動の項目順に回答率が高かったとしている。さらに、25年間の横断的調査で、回答率の高い順序は変化していないが、休息をあげる人は減少し、友人・家族をあげる人が増加しているという。今回調査の男子学生は、好きなこと、休息、友人、運動など、余暇にいろいろなことをして過ごし、女子学生は、休息かそれに近い状態で余暇を過ごしていることが明らかになった。

雑誌の購読について男女間で差があるか検定した結果は、表16、新聞の購読欄について

表15 余暇の過ごし方(複数回答)－
男女別クロス集計の検定結果

	男性/女性 (n=200) (n=169)		
	D	d(%)	SD
1. 映画を見る	7.45	-3.75	
2. 読書(雑誌,新聞を含む)	8.62	-4.44	
3. パソコンをする	8.76	15.02	*
4. 友人と話をする	9.94	-7.51	
5. スポーツをする	6.70	18.13	*
6. テレビ(ビデオ,ラジオを含む)を見る	10.16	-19.36	*
7. コンサートに行く	1.06	0.50	
8. 演劇などを見に行く	1.50	-0.09	
9. サークル活動をする	8.20	24.99	*
10. 雑用をする	8.59	-16.95	*
11. ぼーっとする	9.91	-7.42	
12. その他	8.86	-15.14	

D:理論的な標本特性値の差

d:実際の標本特性値の差

SD:significance difference

*:p<0.05

－表15～表20 共通

表16 雑誌の購読－
男女別クロス集計の検定結果

	男性/女性 (n=200) (n=169)		
	D	d(%)	SD
1. 定期的に読んでいる	9.73	13.28	*
2. たまに買って読んでいる	9.39	-26.38	*
3. 読まない	9.69	11.19	*

表17 新聞の購読欄－
男女別クロス集計の検定結果

	男性/女性 (n=200) (n=169)		
	D	d(%)	SD
1. 社会面	6.83	-3.79	
2. 政治面	3.63	2.72	
3. 国際面	3.91	-1.73	
4. 論説	2.12	-2.37	*
5. コラム・困み記事	5.60	-7.93	*
6. 経済欄	2.79	2.41	
7. 地方版	4.04	-2.33	
8. 文芸・読者欄	3.33	-3.73	*
9. スポーツ欄	8.59	17.98	*
10. 読まない	9.10	-1.31	
11. その他	6.30	-1.24	

は、表17の通りである。雑誌購読に対する回答には有意な男女差が現れ、特徴ある結果となった。男子学生は、「定期的に読んでいる」(40.5%)か、「読まない」(39.0%)かの両極であったのに対し、女子学生は、「たまに読む」と回答した者が44.4%を占めた。新聞の購読欄については、有意差が認められたカテゴリーは4つあったが、うち3つでは男女の差が大きくなかった。「スポーツ欄」をよく読むと回答した割合だけに約18%の男女差が見られた(図5参照)。前述した通り、心身の健康にメディアの影響も指摘されている。小澤らは、女子大生における女性雑誌の購読習慣と痩身理想の内面化傾向の関連を研究し、ダイエットの奨励、スリムなモデルの賞賛を多く掲載する雑誌を定期的に購読している者ほど、痩身理想の内面化が強いという結果を示した。また、女性雑誌の購読習慣と摂食障害傾向との高い相関も示唆している⁸⁾。今回調査の対象女子学生では、雑誌の定期購読者は少数であった。そのことを青年文化を豊かにしていたサブカルチャーの衰退と直結させず、極端なボディイメージの認知障害を防いでいる可能性にも注目したい。

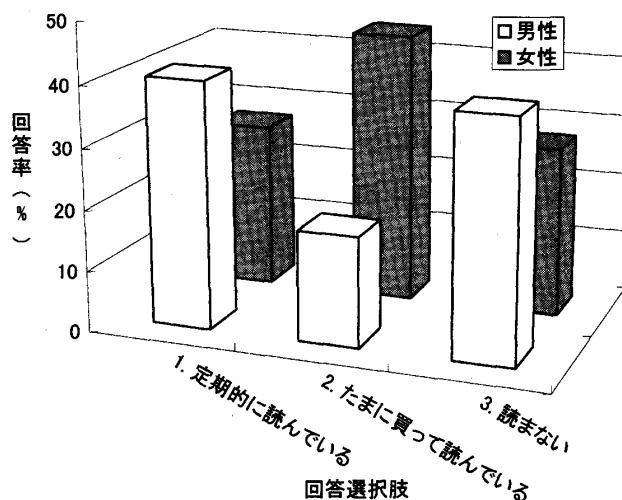


図5 雑誌の購読—男女別クロス集計結果

するスポーツと観戦するスポーツについて尋ね、男女で比較した検定の結果は、表18と

表18 するスポーツ—
男女別クロス集計の検定結果

	男性/女性 (n=200) (n=169)		
	D	d(%)	SD
1. 野球	4.95	11.50	*
2. テニス	6.22	6.99	*
3. 水泳	3.16	-2.05	
4. スケート	3.33	-5.92	*
5. サッカー	6.50	19.91	*
6. バトミントン	5.76	-10.20	*
7. 陸上	1.50	1.00	
8. ジョギング・ウォーキング	5.51	-5.15	
9. ストレッチなどの体操	5.84	-9.70	*
10. しない	8.12	-9.85	*
11. その他	8.20	0.97	

表19 スポーツ観戦—
男女別クロス集計の検定結果

	男性/女性 (n=200) (n=169)		
	D	d(%)	SD
1. 野球	9.10	17.25	*
2. テニス	2.37	1.41	
3. 水泳	2.98	-0.37	
4. スケート	3.63	-7.10	*
5. サッカー	8.59	11.43	*
6. バトミントン	—	—	—
7. 陸上	1.84	0.41	
8. 相撲	1.06	0.50	
9. バレー	7.61	-26.27	*
10. ラグビー	1.84	-0.68	
11. ゴルフ	1.06	0.50	
12. マラソン、駅伝	2.12	-2.37	*
13. 柔道、剣道、空手	2.12	0.91	
14. 格闘技(K1など)	5.15	7.04	*
15. しない	6.64	-6.38	
16. その他	2.98	0.72	

表19に示す。これら2つの質問項目も回答に顕著な男女差が見られた。するスポーツについては、「野球」、「テニス」、「サッカー」を女子学生より男子学生が、「スケート」、「バトミントン」、「ストレッチなどの体操」は男子学生より女子学生が「する」と回答した。ま

た、なにも「しない」と答えた者は、男子学生より女子学生の方が有意に多かった。観戦するスポーツも男女差が認められ、「野球」、「サッカー」、「格闘技(K-1など)」は男子学生の方が、「スケート」、「バレー」は女子学生の方が高い回答率となった。

嗜好品の利用状況を男女で比較したクロス集計の検定結果は、表20の通りである。酒については、男女とも回答の傾向が似ていたが、「よく飲む」と答えた割合だけは、男子学生の方が有意に高かった。タバコについては、4つの回答選択肢で有意差が認められた。とくに、「全く飲まない(吸わない)」と答えた女子学生は97.6%で、男子学生より約30%高くなった。コーヒーについても、酒と同様、男女の回答傾向が似ていたが、「全く飲まない」と答えた割合だけは、女子学生が有意に高かった。

表20 嗜好品の利用状況－
男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性 (n=200) (n=169)		
	D	d(%)	SD
1. 酒			
a. よく飲む	5.92	7.17	*
b. 時々	9.75	-0.41	
c. あまり	9.34	-4.45	
d. 全く飲まない	8.83	-3.63	
2. タバコ			
a. よく飲む	5.92	15.91	*
b. 時々	3.91	5.91	*
c. あまり	3.78	4.32	*
d. 全く飲まない	7.85	-28.63	*
3. コーヒー			
a. よく飲む	9.01	7.01	
b. 時々	8.98	-2.22	
c. あまり	8.79	3.51	
d. 全く飲まない	8.48	-10.81	*

表21 月平均の支出額－
男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性 (n=200) (n=169)		
	D	d(%)	SD
食費(昼食,コンパなどの外食,菓子代など)			
1. ～0.5万円	8.76	-24.28	*
2. ～1万円	8.03	-4.30	
3. ～2万円	9.16	9.51	*
4. 2万円～	8.51	20.26	*
通信費(携帯電話代など)			
1. ～0.5万円	10.06	-1.42	
2. ～1万円	10.22	-1.43	
3. 1万円～	5.24	0.99	
書籍購入費(雑誌,コミックも含む)			
1. 0万円	7.98	2.84	
2. ～0.1万円	10.06	-23.25	*
3. ～0.3万円	8.76	13.93	*
4. 0.3万円～	6.08	5.99	
娯楽費(交際費,パチンコ代など)			
1. 0万円	6.70	8.31	*
2. ～0.3万円	8.24	-18.18	*
3. ～0.5万円	8.59	-2.76	
4. ～1万円	9.07	6.92	
5. 1万円～	6.00	5.49	
被服費(洋服代,靴代)			
1. 0万円	6.76	14.27	
2. ～0.5万円	9.21	2.87	
3. ～1万円	9.24	-5.36	
4. 1万円～	8.73	-13.86	

D:理論的な標本特性値の差

d:実際の標本特性値の差

SD:significance difference

*: $p<0.05$

－表21～表27 共通

4) 消費に関して

5つのカテゴリーに分けて月平均の支出額を質問した結果の検定については、表21に示

す。男女差が現れたのは、「食費」、「書籍購入費」、「娯楽費」についてで、「食費」では、女子学生の37.3%が「5,000円以内」とであると回答したのに対し、男子学生の31.5%が「20,000円以上」と答え、著しい相違が見られた。これは、これまでに明らかになったように、女子学生の方が家族とともに朝食や夕食をとる割合が高いことによるものと考えられる。

表22 自分で買った所有物(複数回答)－
男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
1. 車	2.79	2.41	
2. バイク	5.84	6.67	*
3. 自転車	6.95	10.31	*
4. 携帯電話	8.89	-13.54	*
5. パソコン	4.85	6.63	*
6. 自動車学校費用	5.05	-1.10	
7. 旅行	7.94	-19.49	*
8. 専門学校費用	1.06	-0.59	

表23 ほしいもの(複数回答)－
男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
1. 車	10.07	-6.72	
2. バイク	9.53	31.21	*
3. 自転車	6.22	3.72	
4. 携帯電話	8.51	-0.49	
5. パソコン	9.29	-1.09	
6. 自動車学校費用	8.62	13.02	*
7. 旅行	10.21	-27.64	*
8. 専門学校費用	4.41	-4.10	
9. テレビ,MD	9.96	-1.05	
10. 冷蔵庫	3.33	1.72	
11. 洗濯機	2.37	-0.78	
12. クーラー	3.48	0.04	
13. カメラ(デジカメを含む)	9.94	-17.34	*

自分で買った所有物(複数回答)と欲しいもの(複数回答)についてのクロス集計検定結果は、表22と表23の通りである。自分で買った所有物に関しては、「バイク」と「自転車」、「パソコン」は男子学生の回答が、「携帯電話」と「旅行」は女子学生の回答が有意に高かった。欲しいものでは、「バイク」、「自動車学校費用」を男子学生の方が欲しいと答え、女子学生は、「旅行」と「カメラ(デジカメを含む)」を回答した。購入した物と欲しいものについては、男女とも共通していたが、男子学生はバイクなどの乗り物に、女子学生は旅行に対して、より高い欲求が見られた。1990年代後半は、高校生や大学生の携帯電話の所有率と所有の意味を問う調査が盛んであった。生活必需品ではないはずなのに所有率が高い理由が問題とされ、他人との繋がりや関係を生きるためのツールであるためと考察されていた¹¹⁾。現在では携帯電話を持たない大学生の方が少なく、日常に必須のアイテムとされ、所有率もその理由も注視されなくなった。今回の調査では、欲しいものとして男女とも車と旅行が多く選択されていた。どちらも、一人で乗る(行く)こともできるが、友人と乗る(行く)ことも可能である。友人関係を親密なものにしていく過程で必要なツールとされたのが以前は携帯電話だったが、アルバイトで自分の自由にできる収入が増えれば、今後車や旅行に取って代わられると推測される。

物を購入する際の判断基準(複数回答)を

表24 購入時の判断基準(複数回答)－
男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
1. 色,デザイン	10.24	-12.99	*
2. 価格	8.76	-8.47	
3. 品質(機能性,耐久性など)	9.75	13.78	*
4. 流行	2.98	-0.37	
5. 製造メーカー	4.53	-1.42	
6. 付加価値(オマケ,懸賞など)	2.12	2.00	
7. 友人の意見	2.12	0.91	
8. 世間の評判	2.98	1.82	
9. 自分の感性	8.28	0.88	
10. 店員の対応,意見	1.84	-1.78	
11. その他	1.06	0.50	

尋ねた男女間の検定結果は、表24に示す。男女ともに、「価格」が1位に挙がり、以下、2位「色、デザイン」、3位「品質」であった。男女で比較すると、「価格」については、有意差なくどちらも7割を超えたが、女子学生は「色、デザイン」に、男子学生は「品質」にこだわりを持って物を購入していることが明らかになった。

表25 臨時収入の使い方(複数回答)－
男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200) (n=169)		SD
	D	d(%)	
1. 食費	7.18	11.22	*
2. 洋服	10.01	-32.61	*
3. 住宅費	3.91	7.00	*
4. 図書、雑誌	7.18	4.67	
5. 学費	5.24	-0.10	
6. 娯楽費(映画、交際費)	10.13	1.49	
7. 貯金	10.12	-14.68	*
8. 旅行や自動車など	9.63	-6.69	
9. 整髪、美容	6.95	-15.89	*
10. その他	3.91	0.45	

臨時収入があった場合を想定して、その使い方(複数回答)を質問した結果の検定は、表25に示す。男女とも「洋服」、「貯金」を選んだ割合が高かったが、男女差を比較すると、どちらも女子学生の割合の方がより高く、顕著な差が見られた。また、「食費」は男子学生、

表26 貯蓄－男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200) (n=169)		SD
	D	d(%)	
1. 貯金している	10.15	-17.16	*
2. 貯金していない	10.16	16.16	*

表27 貯金の目的－男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200) (n=169)		SD
	D	d(%)	
1. 親への仕送り	1.06	0.50	
2. 家具類を買うため	1.50	-0.09	
3. 自動車、バイクを買うため	4.17	5.82	*
4. パソコンなどを買うため	2.37	0.32	
5. 旅行に行くため	5.60	-7.93	*
6. 自動車、専門学校に行くため	4.64	3.45	
7. 留学のため	2.79	-1.96	
8. 目的はないが、将来のため	7.18	-14.99	*
9. その他	5.33	-0.69	

「整髪、美容」は女子学生の割合が有意に高かった。

貯蓄と貯金に関する質問についての男女間の検定結果は、表26と表27の通りである。貯金をしているかどうかを尋ねた結果では、男女で回答が分かれ、それぞれに有意な差が現れた。女子学生では、「貯蓄している」、男子学生では、「貯蓄していない」と答えた割合が互いに比較して高かった。男子学生で35.5%、女子学生で52.7%が貯蓄をしていると答えたので、その目的を質問した。男女差は大きくないが、統計的には有意差が認められた選択回答肢があり、男子学生は、「自動車やバイクを買うため」、女子学生では、「旅行に行くため」を選択した。これは前述した、所有物、欲しいものについての回答に繋がる結果であった。他に、「目的はないが、将来のため」と答えた女子学生は、男子学生より14.9%も高く、これは女子学生に特有な考え方であると言える。その他、金銭感覚についても比較したが、男女差は現れなかった。

5) 意識に関して

現在最も大切にしていることについて質問した結果の検定は、表28の通りである。男女とも回答率が1位となったのは、「自分」で、上位は「友人」、「家族、家庭」が占めた。ただし、「家族、家庭」を選んだ割合は、男女に有意差が見られ、男子学生より女子学生の方がより高い回答率を示した。また、「趣味」を選んだのは男子学生に多く、これについても男女差が認められた。前報にも示した通り、この項目についてはベネッセコーポレーションが高校生を対象に同様の調査を行っている。その結果においても、「自分」、「友だち」、「家族」を大事に思う割合が高く、とくに女子生徒は友達や家族を自分と同一視し、愛着を抱く傾向があると考察されていた¹²⁾。今回の対象者のうち、女子学生に同様の結果が見られ、男女差が特徴付けられる質問であった。

人生の目標を尋ねたクロス集計の検定結果を、表29に示す。男女とも1位は、「自分らしく生きる」で、2位は「やりがいのある仕事」、3位は「他人への誠実さや愛」であった。しかし、その回答の割合は異なり、「自分らしく生きる」と答えた女子学生は42.6%、男子学生は28.5%で、その差は14.1%となり男女間に有意差が現れた(図6参照)。今回は日本以外の調査結果との比較を試みていないが、欧米の大学生では、「国際協力への貢献」などを回答する割合が、今

表28 価値—男女別クロス集計の検定結果

	男性/女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
1. 自分	9.49	5.10	
2. 家族、家庭	7.45	-14.67	*
3. 友人	7.13	-2.38	
4. 恋人	5.68	2.40	
5. 大学生活	4.29	-2.42	
6. ペット	2.79	-1.96	
7. アルバイト	1.06	-0.59	
8. お金、貯金	3.48	1.13	
9. 車、バイク	2.37	2.50	*
10. 趣味	5.51	5.77	*
11. 宗教	1.06	-0.59	
12. ボランティア	1.06	0.50	
13. 国(日本)	2.12	2.00	
14. 人類、地球	2.79	1.32	
15. その他	4.53	0.77	

D:理論的な標本特性値の差

d:実際の標本特性値の差

SD:significance difference

*: $p<0.05$

—表28～表40 共通

表29 人生の目標—男女別クロス集計の検定結果

	男性/女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
1. 他人への誠実さや愛	7.66	-1.75	
2. お金や地位	5.05	5.45	*
3. やりがいのある仕事	8.66	5.88	
4. 束縛からの解放	2.79	2.41	
5. 国家社会への貢献	2.12	-0.18	
6. 国際協力への貢献	2.98	-1.46	
7. 信仰	1.06	0.50	
8. 自分らしく生きること	9.77	-14.10	*
9. 何もない	4.29	3.04	
10. その他	5.05	-2.19	

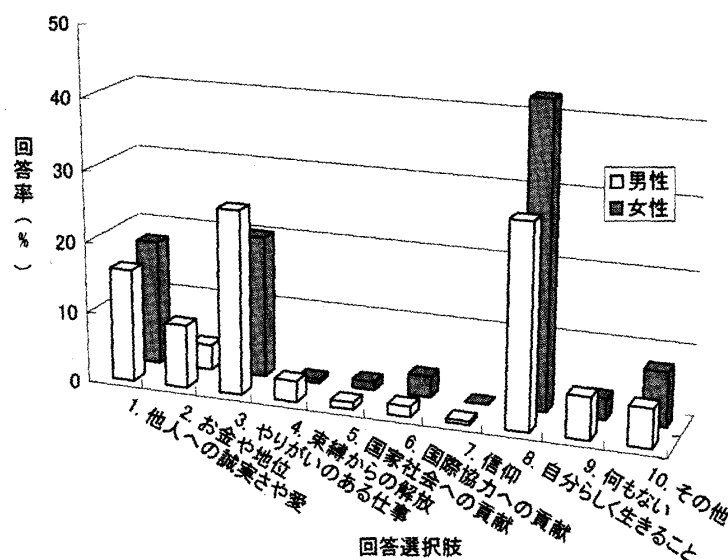


図6 人生の目標—男女別クロス集計結果

回の回答率である2%よりは多いのではないかと予想できる。文献からも、イギリスの若年層はボランティア活動や社会参加の頻度が高く、一般に考えられているより多くの向社会的活動に従事している実態が明らかにされている⁹⁾。前報では、自分を中心とする身近な人間関係を重視した「自己本位」な意識がもたらした結果だと考察したが、その意識の背景には言及できなかった。「自分らしく生きる」ことの下にある「本当の私」、「自分探し」の呪縛については、多方面で早くから分析されてきた。最近では、『個性』を煽られる子どもたち』という著書も出版され、社会が子供たちにまで「本当の私」を性急に探すよう追い立てている状況が指摘されているという(日本経済新聞 2005/1/16)。物質とは異なる実体のない「私らしさ」に拘泥させられ、「他人への愛」の中で、「自分らしく生きること」を人生の目標にする背景には、早い時期から子供たちに対し、精神的、経済的な自立を、「本当の自分に出会いなさい」という形で強い社会や教育現場の要求があるのではないかと考える。そして、その社会の求めは、女子学生により強く伝わっていることが今回の結果から理解できる。

就職に対する意識について、4つのカテゴリーに分類し、質問した結果の検定は、表30の通りである。「就きたい職業を決めているか」、「就職のために何かしているか」については、回答に男女差がなかったが、「就職に対する不安」は女子学生の方がより不安を感じていた。

「卒業後すぐに就職するのは早いと思うか」については、女子学生が35.5%と、男子学生より17%多くの学生が「思う」と回答した。

法律に反する事柄から、友人やコミュニティ間のモラルに関することまで、規範意識を問い、その判断についての男女間の比較検定結果は、表31に示す。詳細は前報で記述したが、全般的に対象者の規範意識は高いとする結果が出た。男女差を比較すると、「覚せい剤や薬物を使うこと」、「万引きをすること」、「人に暴力を振るうこと」、「ごみの分別をしないこと」については、とくに女子学生の意識が高かった。「学校をさぼる」ことは「絶対にいけない」と考える割合だけは、男子学生の方が高かった。警察庁が1989年と1999年の2回、非行を犯した少年

表30 就職に対する意識－
男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性	
	(n=200)	(n=169)
	D	d(%) SD
1. 就きたい職業を決めているか		
a. はい	10.21	-2.03
b. いいえ	10.20	1.03
2. 就職のために何かしているか		
a. はい	9.16	-4.68
b. いいえ	9.27	3.77
3. 就職に対する不安があるか		
a. はい	6.00	-8.77 *
b. いいえ	5.84	7.77 *
4. 卒業後すぐに就職するのは早いと思うか		
a. はい	9.01	-17.00 *
b. いいえ	9.10	15.50 *

表31 規範意識－
男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性	
	(n=200)	(n=169)
	D	d(%) SD
1. 覚せい剤や薬物を使うこと		
a. 絶対にいけない	8.24	-13.48 *
b. いけない	7.35	7.26
c. 気にならない	4.29	5.22 *
2. 万引きをすること		
a. 絶対にいけない	8.92	-21.89 *
b. いけない	8.32	15.57 *
c. 気にならない	4.04	5.32 *
3. 人に暴力を振るうこと		
a. 絶対にいけない	10.08	-21.41 *
b. いけない	9.86	14.01 *
c. 気にならない	4.04	6.41 *
4. 友人との約束を守らないこと		
a. 絶対にいけない	10.19	-1.65
b. いけない	10.23	-1.66
c. 気にならない	3.16	2.32
5. 学校をさぼること		
a. 絶対にいけない	7.85	7.89 *
b. いけない	10.19	-7.08
c. 気にならない	9.04	-2.31
6. ごみの分別をしないこと		
a. 絶対にいけない	8.76	-8.99 *
b. いけない	10.12	-9.22
c. 気にならない	7.75	16.72 *

(非行群)と犯していない少年(一般群)を対象に、少年の社会的逸脱行動に対する許容性についての調査を行っている。一般群も非行群も、10年間で社会的逸脱行動(犯罪、非行)に対する許容性が高くなっており、規範意識が希薄化していることを報告している¹³⁾。その報告では男女差が述べられていなかったが、今回の結果と併せて考えると、若年層全体では規範意識の希薄化が見られるが、今回対象の大学生の規範意識は女子学生の意識の高さによって支えられる結果となった。

日本が最も誇れることは何かを質問し、クロス集計後の検定結果は、表32である。1位は男女とも、「歴史や文化遺産」であったが、その割合を含めて男女の回答結果は異なった。とくに、「科学や技術」に対する評価は男女で有意差が認められ、男子学生の方が女子学生より12%も割合が高かった。対象とした大学のうち1校は国立大学の理系の学部で、その90%が男子学生であった。漠然としたイメージからではなく、普段接している大学の環境をもとに判断し

表32 日本に対する認識—

男女別クロス集計の検定結果

	男性/女性		
	(n=200) (n=169)		SD
	D	d(%)	
1. 歴史や文化遺産	8.98	-8.77	
2. 自然	5.15	-0.60	
3. 文化や芸術	7.35	-4.75	
4. スポーツ	3.48	2.22	
5. 科学や技術	7.51	12.03	*
6. 教育水準	3.33	-3.73	*
7. 生活水準	7.07	-6.16	
8. 社会福祉	1.84	0.41	
9. 安全	6.30	4.22	
10. その他	4.17	4.72	*

表33 生きがい—
男女別クロス集計の検定結果

	男性/女性		
	(n=200) (n=169)		SD
	D	d(%)	
1. 社会のために役立つことをしているとき	4.95	1.67	
2. アルバイトに打ち込んでいるとき	3.33	2.82	
3. 勉強に打ち込んでいるとき	4.29	3.04	
4. スポーツや趣味に打ち込んでいるとき	8.55	10.93	*
5. 家族といるとき	4.85	-4.28	
6. 恋人や友人、仲間といるとき	9.82	-16.97	*
7. 他人に煩わされず一人にいるとき	7.01	0.98	
8. その他	5.42	1.99	

たとえられる。

生きがいについて男女で比較した検定結果は、表33に示す。前報ではいくつかの単純集計結果から、対象者とした大学生が自分を含む身近な人間関係を重視する傾向があることを明らかにした。男女とも「恋人や仲間といるとき」が最も割合が高かったが、女子学生では45.0%、男子学生では22.5%と著しい差が見られた。2番目に多かったのも男女とも同じで、「スポーツや趣味に打ち込んでいるとき」であったが、これについても回答率は異なり、男子学生の割合が有意に高かった。

大学がある鹿児島市への愛着について尋ねた結果を比較検定したものは、表34の通りである。男女とも「好きである」と答えた割合

表34 地域への愛着—

男女別クロス集計の検定結果

	男性/女性		
	(n=200) (n=169)		SD
	D	d(%)	
1. 好きである	10.20	-13.04	*
2. もっと都会にあこがれる	7.24	-1.38	
3. もっと田舎にあこがれる	4.53	-1.42	
4. 嫌いである	3.63	2.72	
5. なんとも思わない	7.75	11.26	*
6. その他	4.29	0.86	

は高かったが、とくに女子学生は61.5%と高く、有意な差が認められた。また、「なんとも

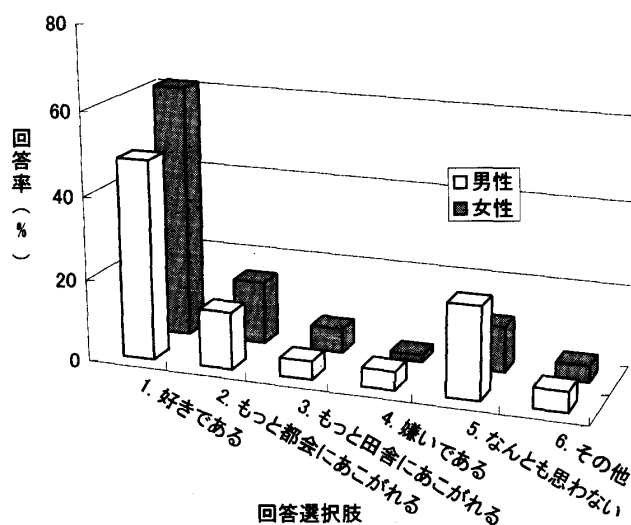


図7 地域への愛着—男女別クロス集計結果

思わない」と答えた割合は、男子学生の方が有意に高く、22.5%であった（図7参照）。

ゆとりの時間をどのように使いたいかの結果を男女間でクロス集計し、検定した結果は、表35に示す。男女とも「趣味や遊びに使う」と答えた者が62%と差がなかった。1選択肢にだけ有意差が見られ、男子学生より女子学生の方が「研究や勉強に使う」と回答した割

表35 ゆとり時間の使い方—
男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
1. 趣味や遊びに使う	9.92	0.37	
2. 家庭生活を豊かにするために使う	5.24	3.17	
3. 研究や勉強に使う	5.92	-8.11	*
4. 社会奉仕・ボランティアのために使う	2.79	1.32	
5. アルバイトを増やす	7.13	-1.29	
6. その他	4.41	3.54	

合が高かった。

社会に対する意識についてのクロス集計検定結果は、表36である。この問いに対して選ばれた選択肢は分散した。その理由は前報で考察した通り、社会に対する問題が絞りきれない、あるいは社会に対する関心自体が薄いと思われる大学生に、世の中を良くするには何が必要かを問うたためであると考えられる。クロス集計を試みたが、男女差がある選択肢は「もっと家族を中心とした考え方を育てる」だけで、選んだのは男子学生に多かった。

表36 社会に対する意識—
男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
1. もっと家族を中心とした考え方を育てる	6.30	7.49	*
2. もっと自分を大切にする考え方を育てる	7.40	0.12	
3. 学歴社会を変える	5.33	-2.88	
4. 男女同権をもっと進める	3.16	0.13	
5. ジェンダーフリーの考え方をなくす	1.84	0.41	
6. 日本経済を活性化する	7.35	-6.93	
7. 政治を変える	8.92	0.06	
8. インターネットなど情報機器に頼る生活をやめる	2.59	0.82	
9. 時間やお金に縛られないスローな生活に戻る	6.76	-6.48	
10. その他	5.33	6.95	*

結婚すべきかどうかについて尋ねた結果の検定は、表37、結婚の目的は、表38、配偶者

表37 結婚観—
男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
1. すべきだ	8.44	15.98	*
2. した方がよい	10.20	-7.20	
3. しない方がよい	1.50	-1.18	
4. しなくてもよい	8.03	-10.85	*
5. わからない	6.64	2.35	

表38 結婚の目的—
男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
1. 自分の子孫を残すため	4.53	5.13	*
2. 経済的に安定するため	3.33	-1.55	
3. 性的満足を得るため	3.16	3.41	*
4. 日常生活を便利にするため	3.16	1.22	
5. 社会的に信用されるため	2.37	0.32	
6. 精神的に安定するため	9.77	4.46	
7. 男女の協力により自分の家庭を築くため	10.03	-16.02	*
8. その他	5.92	1.72	

表39 配偶者に優先する資質—
男女別クロス集計の検定結果

	男性／女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
1. 性格	9.91	-1.96	
2. 愛情	9.71	13.87	*
3. 健康	2.98	2.91	
4. 収入	2.79	-3.05	*
5. 学歴	—	—	—
6. 家柄	—	—	—
7. 家庭環境	2.59	-0.28	
8. 価値観の一致	7.71	-16.54	*
9. 職業	—	—	—
10. その他	4.17	4.72	*

に求める条件を質問した結果は、表39に示す。結婚については、「した方がよい」と答えた割合が男女とも最も多く、40%を超えた。それに対し、「すべきだ」と「しなくてもよい」を選んだ割合は、有意な男女差が認められた。男子学生では、結婚「すべきだ」と回答する者が、女子学生より16.0%多く、「しなくてもよい」と考える女子学生は、男子学生

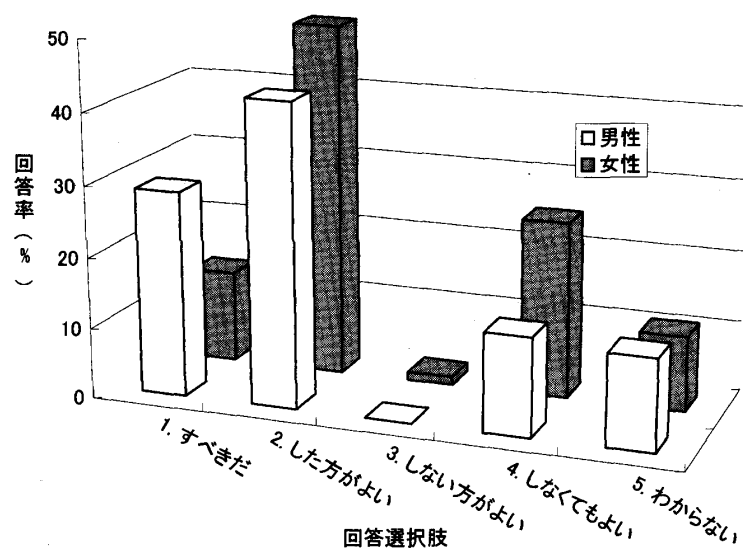


図8 結婚観—男女別クロス集計結果

より10.9%多かった (図8 参照)。また、結婚の目的については、男女とも「男女の協力に

より自分の家庭を築くため」を選んでいたが、有意差が見られ、男子学生より女子学生の割合の方が16.0%高かった。男子学生の方が有意に多かったのは、「自分の子孫を残すため」であった。配偶者に優先する資質として、男子学生では、「愛情」(40.5%)が1位に挙げられ、女子学生では、「性格」(38.5%)が1位であった。「性格」については回答に男女差なく高い割合を示したが、「愛情」と「収入」、「価値観の一致」については有意差が認められ、男女で選択が分かれることが明らかになった。「愛情」は男子学生、「収入」と「価値観の一致」は女子学生が重視する内容であった。これら3つの質問に対する結果の男女差から受ける印象は、男子学生の方が結婚に対して現実的で積極的なのに対し、女子学生の方は結婚に具体的なイメージが想起できないことによる迷いが伝わる。

配偶者に望む働き方についてのクロス集計結果は、表40の通りである。前報でも示唆した通り、3つの選択肢で顕著で有意な男女差が見られた。女子学生は、「男女の区別なく結婚後も働くべき」、「状況に応じて話し合う」としているのに対し、男子学生では、「相手の言う通りでよい」が最も多い。前報で考察した通り、税制や社会保障制度、不況などを背景に、社会状況は「女は外で働き、家を守る」ことを迫っている。それを敏感に感じ取り、真摯に受け止めているのは女子学生であった。前述の結婚に関しては具体的なイメージを思い浮かべられないのに、結婚後の働き方には現実的な考え方を呈するのは、「妻は家で専業主婦」していれば良かった高度経済成長期とは異なる価値観への変換を求める逼迫感が社会を覆っているためである。社会全体、男女ともに考えなければならない問題をマスコミなどを通して当事者とされる女性だけに突きつける偏りにその要因はあると考える。

(2) 年齢が説明要因と考えられる結果

1) 生活に関して

今回の調査では、全対象者369名のうち、18歳が83名、19歳が227名、20歳以上が59名であった。年齢によるクロス集計を行い、18歳と19歳、19歳と20歳以上、18歳と20歳以上の3つの年齢間で各質問に対する回答率を比較し、検定を行った。年齢によって回答率の差を説明できると考えられる結果について報告を行う。

生活時間についての質問の中で、「新聞・読書」時間に関する回答結果は、表41の通りである。いずれの年齢の対象者も、1日に1時間を超えて読書する者は少なかったが、18歳では、「30分以内」と回答した者が20歳以上より有意に多く、20歳以上では、「1時間以内」と答えた割合が19歳より有意に高かった。つまり、時間自体は少ないが、18歳より19歳、19歳より20歳以上の対象者が、新聞・読書の時間がより長いという結果となった。今回の調査で対象としたのは大学の1年生であったため、20歳以上であっても同じ1年生である。カリキュラムの違いによる自宅学習時間差の影響ではなく、年齢が上がるにつれ、

表40 配偶者に望む働き方—
男女別クロス集計の検定結果

	男性/女性		
	(n=200)	(n=169)	
	D	d(%)	SD
1. 男女の区別なく結婚後も働くべき	6.95	-12.62	*
2. 自分のことであれば相手のことであれば妻は家にいるべき	3.16	1.22	
3. 相手の言う通りでよい	9.44	30.30	*
4. 状況に応じて話し合う	10.23	-24.54	*
5. 考えたこともない	3.78	3.22	
6. その他	1.84	1.50	

表41 生活時間一年齢別クロス集計の検定結果

	18歳/19歳			19歳/20歳			18歳/20歳		
	(n=83) (n=227)			(n=227) (n=59)			(n=83) (n=59)		
	D	d(%)	SD	D	d(%)	SD	D	d(%)	SD
新聞・読書時間									
1. 0時間	12.48	-9.00		14.26	3.90		16.31	-5.10	
2. ~0.5時間	11.78	4.80		12.95	12.70		15.12	17.50	*
3. ~1時間	9.10	5.20		10.96	-18.10	*	14.39	-12.90	
4. 1時間~	5.54	1.20		6.16	-0.30		7.69	0.90	

D:理論的な標本特性値の差

d:実際の標本特性値の差

SD:significance difference

*: $p<0.05$

—表41～表44 共通

新聞・読書時間が増加する傾向にあることが明らかになった。

生活に対する満足感について年齢間で有意差が認められた結果は、表42の通りである。

19歳と20歳以上の対象者間では、「衣・食・住における物質面」、「趣味、生きる目標などの心の面」、「安全、快適さなどの環境面」、「友人、親子関係などの対人面」において、20歳以上と比べ19歳の満足感が著しく有意に高かった。19歳の満足感が有意に高い理由を挙げることは困難だが、高校を卒業して1年以上2年未満が経過し、校則などから縛られる生活から自分の意思が優先される生活に馴染んできたためではないかと思われる。

表42 生活に対する満足感一年齢別クロス集計の検定結果

	19歳/20歳		
	(n=227) (n=59)		
	D	d(%)	SD
1. 衣・食・住における物質面			
a. 満足	13.42	19.70	*
2. 趣味、生きる目標などの心の面			
a. 満足	10.61	12.10	*
3. 安全、快適さなどの環境面			
a. 満足	12.95	21.10	*
c. どちらでもない	11.73	-18.00	*
4. 友人、親子関係などの対人面			
a. 満足	13.30	16.20	*

学業の目的について年齢間でクロス集計後、検定した結果を、表43に示す。2位に挙げ

表43 学業の目的一年齢別クロス集計の検定結果

	18歳/19歳		
	(n=83) (n=227)		
	D	d(%)	SD
1. 深い専門知識	7.86	-6.80	
2. 幅広い知識や教養	10.29	2.20	
3. 理論的な理解力や分析力	3.15	1.10	
4. 人と異なる独創性や創造性	7.54	1.10	
5. 実社会で役に立つ技術や知識	10.46	-9.00	
6. ものの見方や考え方	9.47	11.20	*
7. 資格取得のための知識	6.46	3.40	
8. 卒業証書	4.22	2.60	
9. とくに考えたことはない	5.21	-4.50	
10. その他	3.46	-1.00	

られたのは3つの年齢の対象者とも、「幅広い知識や教養」であったが、最も多かった回答は、年齢によって異なった。18歳では、「ものの見方や考え方」を学業の目的と答えた者が多かったに対し、19歳と20歳以上では、「実社会で役に立つ技術や知識」が多かった。有意差が認められた結果は、18歳と19歳の間で、「ものの見方や考え方」での回答差に対してであった。高校を卒業して間がない18歳の対象者にとって、大学とは幅広い知識や教養

を得て自分の見聞を広めてくれる場と考えられているが、年齢を重ねると幅広い知識や教養とともに現実的なスキルを求める場となっていくことが明らかになった。

生活の不安(複数回答)についての検定結果は、表44の通りである。それぞれの年齢で感じる不安の内容は異なっていたが、不安内容の相違に対して年齢が影響していると考えられる項目は、18歳と20歳以上の間での「自分の問題-健康」だけであった。20歳以上は18歳の対象者に比べて、健康問題に不安を感じているという結果であったが、具体的に健康への留意と心身の状態を尋ねる質問項目では、顕著な差は認められなかった。今回の健康に関する質問内容以外で、健康に不安を感じていることが示された。

2) 文化に関して

スポーツ観戦に対する質問結果を検定したものは、表45に示す。「サッカー」については、18歳、19歳、20歳以上のいずれの対象者とも割合が20%を超え、年齢の差なく観戦されていた。「野球」と「格闘技(K-1など)」は、20歳以上の観戦割合が他の年齢より有意に高く、「バレー」は、18歳が観戦する割合が高かった。するスポーツについては、有意差が認められた選択肢は3つあったが、標本値の差が10%以下であったために検定結果をまとめていない。20歳以上で「野球」をする割合が多少高くなっていた。昭和54年に当時の総理府統計局が調査した結果¹⁴⁾によれば、中学・高校に通う者は男女とも団体球技が盛んであったが、大学生になると野外系スポーツが増加していた。その理由は、共にスポーツをする人の数が影響しており、中学・高校に通う間は学校の仲間が集められるからで、大学生になると仲間が多様化するためであるとしていた。スポーツをする時間自体も少なくなり、年齢に付随する他の条件も関わってくるため、するスポーツについてはスポーツ観戦のような明らかな年齢差は見られなかった。

嗜好品の利用状況について有意差が認められた結果は、表46の通りである。嗜好品のう

表44 生活の不安(複数回答)－
年齢別クロス集計の検定結果

	18歳/20歳 (n=83) (n=59)		
	D	d(%)	SD
1. 自分の問題			
a. 健康	13.27	-18.50	*
b. 性格	15.12	8.80	
c. 能力	16.66	8.20	
d. 宗教	—	—	—
e. その他	7.70	-4.90	

表45 スポーツ観戦－
年齢別クロス集計の検定結果

	18歳/20歳 (n=83) (n=59)		
	D	d(%)	SD
1. 野球	14.65	-16.30	*
5. サッカー	14.65	4.00	
6. バドミントン	—	—	—
9. バレー	10.84	17.60	*
10. ラグビー	4.80	0.70	
14. 格闘技(K1など)	9.63	-10.50	*

D: 理論的な標本特性値の差

d: 実際の標本特性値の差

SD: significance difference

*: $p < 0.05$

―表45～表46 共通

表46 嗜好品の利用状況－年齢別クロス集計の検定結果

	19歳/20歳 (n=227) (n=56)			18歳/20歳 (n=83) (n=56)		
	D	d(%)	SD	D	d(%)	SD
2. タバコ						
a. よく飲む	8.90	-20.50	*	11.36	-23.50	*
b. 時々	5.76	-1.10		6.15	-2.70	
c. あまり	5.25	0.10		6.15	0.20	
d. 全く飲まない	11.36	24.50	*	14.09	27.00	*

ち、「タバコ」についてのみ著しい差が見られた。「よく飲む（吸う）」と回答したのは、18歳では3.6%、19歳では6.6%、20歳以上では27.1%と、年齢が上がるにつれて喫煙率も上がり、逆に「全く飲まない（吸わない）」と答えたのは、18歳が88.0%、19歳で85.5%、20歳以上で61.0%と、年齢差による相関が現れた。

3) 消費に関して

月平均の支出額については、19歳と20歳以上の間で有意差が認められたので、表47に

表47 月平均の支出額－
年齢別クロス集計の検定結果

	19歳／20歳 (n=227) (n=59)		
	D	d(%)	SD
食費(昼食,コンパなどの外食,菓子代など)			
1. ～0.5万円	12.38	20.60	*
2. ～1万円	11.12	2.00	
3. ～2万円	13.00	-8.30	
4. 2万円～	11.66	-12.00	*
書籍購入費(雑誌,コミックも含む)			
1. 0万円	10.97	3.20	
2. ～0.1万円	14.17	15.30	*
3. ～0.3万円	12.19	-14.90	*
4. 0.3万円～	8.39	-0.90	
娯楽費(交際費,パチンコ代など)			
1. 0万円	9.03	3.40	
2. ～0.3万円	11.36	7.50	
3. ～0.5万円	12.00	5.20	
4. ～1万円	12.65	3.60	
5. 1万円～	9.02	-15.80	*
被服費(洋服代,靴代)			
1. 0万円	9.16	-4.70	
2. ～0.5万円	13.00	-12.60	*
3. ～1万円	12.95	8.40	
4. 1万円～	12.19	12.80	*

D: 理論的な標本特性値の差

d: 実際の標本特性値の差

SD: significance difference

*: $p < 0.05$

示す。「食費」、「書籍購入費」、「娯楽費」では、20歳以上の方が19歳に比べて支出額が有意に高くなったのに対し、「被服費」では、月に「1万円以上」使うと答えた者が19歳では26.4%と、20歳以上に比べ12.8%も多かった。

4) 意識に関して

自分を大人であると思うかについて尋ねた自己像を年齢間で比較した検定結果は、表48の通りである。前報で報告した通り、自分を「おとな」だと認識している対象者は、11.7%と少なかったのに対し、まだ「こども」だと感じているのは45.3%であった。また、「どちらでもない」と答えた割合も高く39.6%であった。これら自己認識の年齢間での相違を確認するために行ったクロス集計では、「おとな」であると回答した割合は、18歳で7.2%、19歳で11.0%、20歳以上で20.3%と、年齢に相関し

表48 自己像－
年齢別クロス集計の検定結果

	18歳／20歳 (n=83) (n=59)		
	D	d(%)	SD
1. おとな	11.09	-13.10	*
2. こども	16.61	24.90	*
3. どちらでもない	16.20	-13.30	
4. その他	4.80	-2.20	

D: 理論的な標本特性値の差

d: 実際の標本特性値の差

SD: significance difference

*: $p < 0.05$

―表48～表49 共通

て増加した。「こども」と回答した結果では、18歳で55.4%、19歳で45.4%、20歳以上で30.5%と、これは年齢に逆相関した。顕著な差が現れ、有意差が認められたのは表48に示す通り、「おとな」と「こども」における18歳と20歳以上の間であった。この質問項目については、先に示した男女間では回答差が見られなかった。「おとな」と「こども」の回答比に差はあるが、年齢が回答に影響を与える結果となった(図9参照)。くもん子ども研究

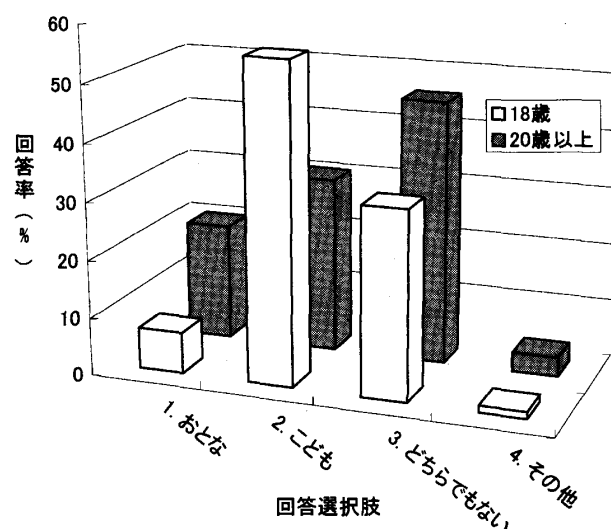


図9 自己像一年齢別クロス集計結果

所が、小学4年生から高校3年生までを対象に同様の調査を行っている¹⁵⁾。高校生では、「子どもだと思う」と答えたのが49.6%、「大人だと思う」と答えたのが11.6%と、大学生を対象にした今回の調査結果とほぼ同じ数値を示した。前報では他の調査結果を引用して、就職が大人であることの自覚を促す契機になるのではないかと考察した。就職も大きな転機になりうると想定できるが、今回の調査対象者では、年齢を重ねて少しずつ自覚する者もいることが明らかになった。2005年冬の某化粧品会社のキャンペーンでは、「28歳、少女でもない、大人でもない幸せ」というキャッチコピーとともにテレビコマーシャルが盛んに流されていた。前述した通り、早期の精神的、経済的な自立を促す教育現場や社会の実態が示唆される一方、若年層に大きな影響力を持つマスメディアを利用して、「28歳は大人でも子どもでもない」というイメージを押し付ける状況も横たわっている。そのような捻じれの中で、大学生が自己を正確に認識することの困難さが伺われる。

規範意識について年齢間でクロス集計した検定結果は、表49に示す。「万引きをすること」、「人に暴力を振るうこと」が「絶対にいけない」と答えた対象者に、年齢間の相違が見られた。18歳と19歳では、「絶対にいけない」と回答した割合が高かったのに対し、20歳以上では10%を超えて低かった。とくに、19歳との間で有意差が認められた。前述した通り、今回調

表49 規範意識—
年齢別クロス集計の検定結果

	19歳/20歳 (n=227) (n=59)		
	D	d(%)	SD
2. 万引きをすること			
a. 絶対にいけない	12.48	17.00	*
b. いけない	11.66	-12.00	*
c. 気にならない	5.75	-5.40	
3. 人に暴力を振るうこと			
a. 絶対にいけない	14.08	16.80	*
b. いけない	13.83	-8.90	
c. 気にならない	5.29	-8.40	*

査の対象者は規範意識が高く、それは女子学生の規範意識の高さに牽引されたものであった。警視庁の発表によれば、2004年 1年間に大麻事件で摘発された人数の前年比は8.7%増、錠剤型麻薬事件の摘発者数の前年比は63.3%増で、いずれも過去最多だったということである。とくに、大麻事件で摘発された大学生は過去最多であった（共同通信社 2005/1/28）。それに対し、覚せい剤の事件数は16.4%減で、若者の嗜好が覚せい剤から大麻、錠剤型に移っているという。また、合成麻薬の検挙者数も過去最多であったといい、乱用の拡大が進んでいるとしている（毎日新聞 2005/1/28）。このクロス集計からは、20歳以上では犯罪やルールの内容によって、規範意識が希薄化している者が見られた。その間隙を縫って薬物などが拡がることを防いでいくことが重要であると考えられる。

(3) 出身地が説明要因と考えられる結果

1) 生活に関して

今回の調査では、全対象者369名のうち、鹿児島市内の出身者が129名、鹿児島県内ではあるが鹿児島市外の出身者が119名、鹿児島県外の出身者が120名であった（N. A. の1名は除外する）。鹿児島県外の出身者は前報に詳述した通り、九州だけではなく、四国、関西、関東、東北まで全国各地の出身である。また、外国籍の対象者3名も含む。対象者の出身地を鹿児島市内、鹿児島市外で鹿児島県内、鹿児島県外に分類し（以下、それぞれを「市内」、「県内」、「県外」と記載する）、出身地によるクロス集計を行い、各質問に対する回答率を比較して検定を行った。分類した出身地によって回答率の差を説明できると考えられる結果について報告を行う。

出身地による回答差が見られた生活に対する満足感については、表50に示す。「衣・食・

表50 生活に対する満足感－
出身地別クロス集計の検定結果

	市内／県外	
	(n=129)	(n=120)
	D	d(%) SD
1. 衣・食・住における物質面		
a. 満足	11.53	15.50 *
b. やや満足	11.75	-5.70
c. どちらでもない	9.03	-2.00
d. やや不満	8.84	-5.10
e. 不満	5.10	-2.70
3. 安全、快適さなどの環境面		
a. 満足	10.98	19.00 *
b. やや満足	11.97	-0.30
c. どちらでもない	10.38	-14.50 *
d. やや不満	8.09	-0.90
e. 不満	3.83	-3.40

市内：鹿児島市内の出身者

県内：鹿児島市外で鹿児島県内の出身者

県外：鹿児島県外の出身者

‘－表50～表53 共通

D: 理論的な標本特性値の差

d: 実際の標本特性値の差

SD: significance difference

*: $p < 0.05$

‘－表50～表53 共通

住における物質面」と「安全、快適さなどの環境面」について「満足」と回答した者は、

市内出身者に多く、県外出身者の回答とは有意な差が認められた。市内の出身者が必ずしも親と同居しているとは限らないが、後述の居住方法におけるクロス集計結果と傾向が似通っていることから、親との同居が物質面と環境面の満足に大きく影響していると推測される。

大学生活に対する満足感についての回答結果への出身地の影響を検定した結果は、表51の通りである。「所属大学の学生であること」に「満足」しているのは市内の出身者に多く、県外の出身者に比べ16.8%も高かった。県外の出身者は「どちらでもない」と答えた割合が47.5%で、この2つの選択肢については、市内と県外の出身者間で有意差が認められた。

表51 大学生活に対する満足感－
出身地別クロス集計の検定結果

	市内／県外		
	(n=129)	(n=120)	
	D	d(%)	SD
4. 所属大学の学生であること			
a. 満足	10.69	16.80	*
b. やや満足	11.22	6.80	
c. どちらでもない	11.88	-23.50	*
d. やや不満	6.91	-3.00	
e. 不満	4.13	2.20	

生活の不安(複数回答)についての回答を出身地間でクロス集計し検定した結果を、表52に示す。県外出身者の50.0%が「交友－恋愛」に、73.3%が「学校生活－勉学」に不安を感じているという結果を得た。これは、市内出身者の回答と約14%の差があり、有意差が見られた。また、県外出身者は「時事問題－政治」についても24.2%が不安であると回答したが、市内と県内の出身者の回答率は高くなく、この問題については県外出身者だけの関心が高いことから、県外出身者の不安の中身の特徴付けるものとなった。

表52 生活の不安(複数回答)－
出身地別クロス集計の検定結果

	市内／県外		
	(n=129)	(n=120)	
	D	d(%)	SD
3. 交友			
a. 恋愛	12.29	-14.30	*
b. その他	7.34	-0.70	
4. 学校生活			
a. 勉強	11.79	-14.40	*
b. 学費	7.97	1.60	
c. その他	3.81	3.10	
5. 時事問題			
a. 政治	9.65	-11.00	*
b. 戦争	11.85	6.30	
c. 青少年問題	5.93	-2.80	
d. その他	4.65	-1.10	

親との会話の内容について出身地別に比較し検定した結果は、表53の通りである。分類した6カテゴリーの中で、「学校生活」、「友人、異性関係」、「社会、時事問題」、「芸能、スポーツ」について、市内出身者と県外出身者の間で有意差が認められた。いずれのカテゴリーについても、市内出身者の方が「よくする」と答えた割合が高く、県外出身者は「時々する」と回答した者が多かった。

表53 親との会話－
出身地別クロス集計の検定結果

	市内／県外		
	(n=129)	(n=120)	
	D	d(%)	SD
1. 勉学や進学など学校生活について			
a. よくする	11.65	13.00	*
3. 友人と異性関係について			
a. よくする	9.21	10.90	*
5. 事件、事故など社会・時事問題について			
a. よくする	9.31	11.70	*
6. 芸能、スポーツなどの話題について			
a. よくする	10.57	12.00	*

2) 意識に関して

現在最も大切にしていることについて尋ねた結果を出身地間でクロス集計し検定した結果の一部を、表54に示す。市内と県外の出身者間において、2つの選択肢に有意差が認められた。「自分」については、出身地に関係なく最も多く選ばれたが、2番目に挙げられたのは、県外出身者では「恋人」、市内出身者では「家族、家庭」であった。価値については、

クロスさせた質問項目による大きな影響は見られず、「自分」を大切とした割合が高かった。その中で、県外出身者が「恋人」を選択した点は注目できる。前に示した通り、生活の不安についての結果の中で、県外出身者の50.0%が「交友-恋愛」に不安を感じると答えており、2つの結果から、県外出身者の現在の大学生活の一端が浮かび上がる。市内出身者が自分と家族、家庭を中心に生活しているのに対し、県外出身者は親密な異性の他者との関わりが生活の中に入り込み、人間関係や世界を広げつつあることが伺われる。

人生の目標についてのクロス集計結果を検定したものを、表55に示す。県外出身者では「やりがいのある仕事」が28.3%と1位で、「自分らしく生きること」が25.0%と2位であった。県内出身者では、1位が「自分らしく生きること」(40.3%)、2位が「他人への誠実さや愛」(18.5%)、3位が「やりがいのある仕事」(16.8%)であった。「自分らしく生きる」ことについては、市内出身者でも1位(39.5%、有意差有)に挙がっており、県外出身者との相違が際立つ結果となった。

大学が在る鹿児島市への愛着について質問し検定を行った結果は、表56の通りである。この表では省略したが、「好きである」と「なんとも思わない」と回答した結果は、市内と県内、市内と県外、県内と県外のそれぞれの出身地間で有意な差が認められた。鹿児島市が「好きである」とした割合は、市内出身者で64.3%、県内出身者で50.4%、県外出身者で48.3%であった。また、「なんとも思わない」では、市内出身者の9.3%、県内出身者の16.0%、県外出身者の26.7%が回答した。大事に思う自分や家族が生まれ住んでいることが、鹿児島という街に投影されるため、市内出身者にとって自分や家族と同様に鹿児島市に愛着が持てるのではと推察される。

配偶者に望む働き方についての出身地間の回答差を検定した結果は、表57に示す。「相手の言う通りでよい」と考える割合は、県外出身者が有意に高く、「状況に応じて話し合う」と回答したのは、市内出身者と県内出身者が多かった(図10参照)。県外出身者の意識や生

表54 価値一
出身地別クロス集計の検定結果

	市内／県外		
	(n=129)	(n=120)	
	D	d(%)	SD
1. 自分	11.45	-3.80	
2. 家族・家庭	9.13	11.70	*
3. 友人	8.94	3.80	
4. 恋人	7.21	-9.50	*
5. 大学生活	4.86	-3.50	

市内:鹿児島市内の出身者

県内:鹿児島市外で鹿児島県内の出身者

県外:鹿児島県外の出身者

―表54～表57 共通

D:理論的な標本特性値の差

d:実際の標本特性値の差

SD:significance difference

*:p<0.05

―表54～表57 共通

表55 人生の目標一
出身地別クロス集計の検定結果

	県内／県外		
	(n=119)	(n=120)	
	D	d(%)	SD
1. 他人への誠実さや愛	9.74	1.00	
2. お金や地位	6.68	-6.60	
3. やりがいのある仕事	10.60	-11.50	*
4. 束縛からの解放	3.64	-0.80	
5. 国家社会への貢献	0.00	0.00	
6. 国際協力への貢献	3.23	-1.70	
7. 信仰	1.60	0.80	
8. 自分らしく生きること	11.89	15.30	*
9. 何もない	5.75	2.50	
10. その他	6.32	-3.30	

表56 地域への愛着一
出身地別クロス集計の検定結果

	市内／県外		
	(n=129)	(n=120)	
	D	d(%)	SD
1. 好きである	12.32	16.00	*
2. もっと都会にあこがれる	9.04	7.70	
3. もっと田舎にあこがれる	4.63	-2.70	
4. 嫌いである	4.14	-2.60	
5. なんとも思わない	9.48	-17.40	*
6. その他	4.37	-0.20	

表57 配偶者に望む働き方―出身地別クロス集計の検定結果

	県内／県外			市内／県外		
	(n=119) (n=120)		SD	(n=129) (n=120)		SD
	D	d(%)		D	d(%)	
1. 男女の区別なく結婚後も働くべき	7.89	-3.30		8.94	5.30	
2. 自分のことであれば相手のことであれば妻は家にいる	3.96	-3.40		4.39	-1.90	
3. 相手の言う通りでよい	11.97	-13.10	*	11.65	-14.40	*
4. 状況に応じて話し合う	12.65	23.00	*	12.32	16.20	*
5. 考えたこともない	4.82	-2.50		4.88	-1.90	
6. その他	2.82	-0.90		2.24	-1.70	

活状況を読み解くために、恋人の存在は重要なファクターだと考えられるが、「相手の言う通りでよい」という答えからは、相手に対しての対等なパートナー意識が感じられない。「～すべき」といった固定化した考え方は、生活や生き方を窮屈にするが、「相手の言う通りでよい」といった考え方は、パートナー間の重要な問題を解決せずただ回避するだけで、不安をおおもとなる。

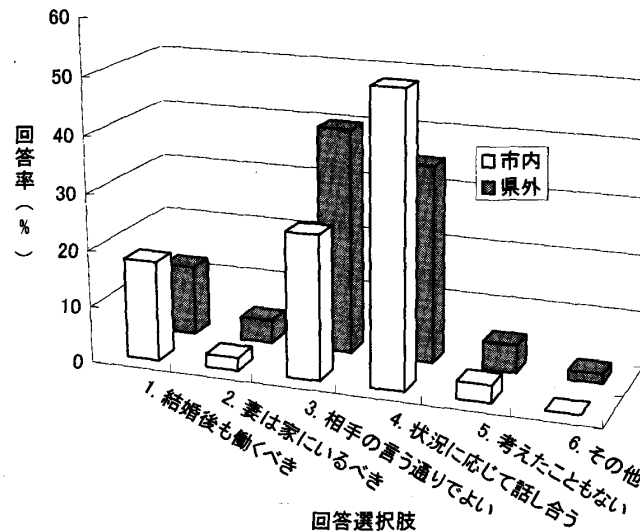


図10 配偶者に望む働き方―出身地別クロス集計

(4) 居住方法が説明要因と考えられる結果

1) 生活に関して

今回の調査では、全対象者369名に対し居住方法を質問したところ、親、家族と同居する者が182名、一人住まいが170名、その他が17名であった。その他には、親とは別居しているが兄弟など同居、寮生活者を含む（以下それぞれを、「親同居」、「独居」、「その他」と表記する）。まず、居住方法の違いごとに各質問に対する回答率を比較し、次に検定を行った。居住方法によって回答率の差を説明できるとみなされる結果について、以下に報告する。

生活時間を6つのカテゴリーに分け、それぞれと居住方法との違いの間でクロス集計を行った。その検定結果は、表58の通りである。「新聞・読書時間」、「インターネット使用時間」、「友人との交流時間」において、親と同居する対象

表58 生活時間―居住別クロス集計の検定結果

	親同居／独居		
	(n=182)	(n=170)	
	D	d(%)	SD
新聞・読書時間			
1. 0時間	10.38	-22.90	*
2. ～0.5時間	9.57	29.30	*
3. ～1時間	8.01	-4.10	
4. 1時間～	4.72	-3.30	
インターネット使用時間			
1. 0時間	10.44	-14.60	*
2. ～0.5時間	7.91	8.50	*
3. ～1時間	7.76	4.60	
4. 1時間～	7.47	-0.50	
友人などとの交流時間 (サークル活動も含む)			
1. 0時間	7.18	8.20	*
2. ～1時間	9.51	12.30	*
3. ～2時間	9.37	-12.10	*
4. ～3時間	6.56	-8.20	*
5. 3時間～	7.36	-2.70	

親同居：親、家族と同居

独居：一人住まい

その他：兄弟だけで同居、寮生活など

* 表58～表65 共通

D: 理論的な標本特性値の差

d: 実際の標本特性値の差

SD: significance difference

*: $p < 0.05$

* 表58～表65 共通

者と独居の対象者で相違が現れた。「新聞・読書時間」、「インターネット使用時間」とともに「0時間」と答えた割合は独居の対象者に多く、いずれも50%を超えた。それに対し、「友人との交流時間」を「0時間」としたのは、親同居の対象者に多く、独居の対象者では、「1時間以上 2時間未満」(34.1%)、「2時間以上 3時間未満」(15.3%)の回答率が有意に高かった。

生活に対する満足感を居住方法別にクロスさせた集計の検定結果は、表59に示す。「物質面」と「環境面」で有意差が認められ、2つの面に対して「満足」と答えたのは、親と同居の対象者に多かった。

大学生生活に対する満足感についてクロス集計を行った検定結果を、表60に示す。「所属大学の学生であること」への満足感において、居住方法の違いが影響する結果が見られた。「満足」と答えたのは親と同居する対象者に多く(29.1%)、「どちらでもない」と答えたのは独居者に多く、42.2%であった。

親しい友人との間に保っている関係を尋ね、居住方法が及ぼす影響を検定した結果は、表61の通りである。6つのカテゴリーの中で、「立ち入った付き合いは避けている」、「相手に嫌われないように気をつけている」、「携帯やメールで頻繁に連絡しあう」、「学校で話をする」ことに居住方法の違いが及ぼす影響は見られなかったが、「よく休日買い物や遊びに行く」、「互いの家に行って話をする」ことについては有意差が見られた。いずれも、独居の対象者の回答比率が高く、「互いの家に行って話をする」と答えた者は、56.5%であった。独居の対象者は同居によって強いられる家族との関わりが薄い。そのため、親同居者より独居者の方が、友人と休日買い物や遊びに行ったり、互いの家に行って話をしたりと、友人との関わりに時間を割くことができる。

生活の不安に対するクロス集計の検定結果は、表62に示す。ここまでに報告した性別、年齢、出身地とのクロス集計結果とは異なり、居住方

表59 生活に対する満足感—
居住別クロス集計の検定結果

	親同居／独居 (n=182) (n=170)		
	D	d(%)	SD
1. 衣・食・住における物質面			
a. 満足	9.78	14.90	*
b. やや満足	9.89	-1.70	
c. どちらでもない	7.42	-4.50	
d. やや不満	7.41	-5.50	
e. 不満	4.22	-3.20	
3. 安全・快適さなどの環境面			
a. 満足	9.46	18.00	*
b. やや満足	10.00	-4.10	
c. どちらでもない	8.60	-9.50	*
d. やや不満	6.84	-1.40	
e. 不満	2.89	-3.00	*

表60 大学生生活に対する満足感—
居住別クロス集計の検定結果

	親同居／その他 (n=182) (n=17)		
	D	d(%)	SD
4. 所属大学の学生であること			
a. 満足	9.02	9.10	*
b. やや満足	9.31	6.10	
c. どちらでもない	10.02	-12.70	*
d. やや不満	6.01	-4.10	
e. 不満	3.49	0.90	

表61 友人関係—居住別クロス集計の検定結果

	親同居／独居 (n=182) (n=170)		
	D	d(%)	SD
5. よく休日買い物や遊びに行く			
a. はい	9.59	-13.50	*
b. いいえ	9.81	1.70	
c. どちらでもない	10.04	11.80	*
6. 互いの家に行って話をする			
a. はい	10.21	-33.40	*
b. いいえ	9.87	29.60	*
c. どちらでもない	9.18	3.90	

表62 生活の不安(複数回答)—
居住別クロス集計の検定結果

	親同居／独居 (n=182) (n=170)		
	D	d(%)	SD
1. 自分の問題			
a. 健康	8.44	-12.80	*
b. 性格	9.37	3.80	
c. 能力	10.36	6.70	
d. 宗教	—	—	—
e. その他	3.93	1.50	

法の違いが生活の不安に及ぼすと考えられる結果は少なかった。ただ、「自分の問題－健康」のみに顕著な差が見られ、独居の対象者の回答率が際立っていた。

居住方法の相違が親との会話に影響を及ぼしたと考えられる検定結果を、表63に示す。

「学校生活」、「社会・時事問題」、「芸能・スポーツ」について親と会話を「よくする」と答えたのは、親同居の対象者に多かった。有意差が認められない選択肢もあったが、分類した6つのカテゴリー全てにおいて、親と同居の対象者は、「よく(話を)する」、「時々(話を)する」と回答した者が多かった。

平日の朝食、夕食を誰と食べるかについて質問したクロス集計の検定結果は、表64、平日の朝食と夕食の食生活に関しては、表65の通りである。誰と食べるかについては、ここ

表63 親との会話－居住別クロス集計の検定結果

	親同居／独居 (n=182) (n=170)		
	D	d(%)	SD
1. 勉学や進学など学校生活について			
a. よくする	9.67	12.10	*
5. 事件、事故など社会・時事問題について			
a. よくする	7.81	9.60	*
6. 芸能、スポーツなどの話題について			
a. よくする	8.34	13.50	*

表64 食風景－居住別クロス集計の検定結果

	親同居／独居 (n=182) (n=170)		
	D	d(%)	SD
平日の朝食			
1. 家族全員	6.64	22.00	*
2. ひとり	10.06	-13.50	*
3. 友人	2.49	-0.70	
4. 食べない	7.64	-15.90	*
5. その他	5.37	9.10	*
平日の夕食			
1. 家族全員	9.34	53.30	*
2. ひとり	10.44	-52.80	*
3. 友人	6.70	-11.60	*
4. 食べない	1.54	-0.10	
5. その他	6.63	11.70	*

表65 食生活－居住別クロス集計の検定結果

	親同居／独居 (n=182) (n=170)		
	D	d(%)	SD
平日の朝食			
1. 自分で作る	9.43	-42.90	*
2. 家族が作る	10.15	73.60	*
3. 家族と分担して作る	2.71	3.30	*
4. 食べない	8.16	-25.20	*
5. 外食	1.59	-1.20	
6. 弁当など出来合いを多用	5.92	-3.50	
7. その他	3.62	-3.10	
平日の夕食			
1. 自分で作る	9.61	-59.60	*
2. 家族が作る	10.21	75.80	*
3. 家族と分担して作る	4.94	11.50	*
4. 食べない	1.06	0.50	
5. 外食	5.57	-6.80	*
6. 弁当など出来合いを多用	6.41	-18.40	*
7. その他	4.73	-2.10	

に説明するまでもなく、平日の朝食、夕食のいずれも、「家族全員」と答えた独居の対象者は0%であった。独居者と親同居者との違いは、朝食では「食べない」、夕食では「友人」と食べると回答した独居者が有意に高かった点であった。食事の準備については、朝食、夕食ともに、親との同居者は「家族が作る」、独居者は「自分で作る」と回答した割合が著しく高かった。さらに、独居対象者の回答に特徴が見られ、朝食では「食べない」、夕食では「外食」、「弁当など出来合いを多用」する者が高い割合を占めた。男女間の差も見られたが、前報において予測した通り、食事の準備は居住方法の相違による影響が強かった。小学生や中学生を対象とした調査では、家事手伝いの有無、その内容、時間などについての質問を多く目にするが、大学生を対象とした調査では少ない。子供を対象とした調査では、家庭内の仕事を分担するのは当然であることが前提の設問であるが、大学生では祖先帰りのように問題にされることがなくなる。大学生でも男女の区別なく家庭内の仕事を分担するのは当然、あるいは、一人暮らしでは外食に頼りすぎてはならないという視点を

持って、この問題を考えていくべきである。

2) 文化に関して

余暇の過ごし方についてのクロス集計検定結果は、表66の通りである。回答の傾向は似

表66 余暇の過ごし方(複数回答)－
居住別クロス集計の検定結果

	親同居／独居		
	(n=182)	(n=170)	
	D	d(%)	SD
1. 映画を見る	7.58	-3.90	
2. 読書(雑誌,新聞を含む)	8.76	1.80	
3. パソコンをする	8.91	12.10	*
4. 友人と話をする	10.17	0.30	
5. スポーツをする	6.77	-5.40	
6. テレビ(ビデオ,ラジオを含む)を見る	10.38	10.40	*
7. コンサートに行く	1.06	0.50	
8. 演劇などを見に行く	1.54	-0.10	
9. サークル活動をする	8.47	-16.80	*
10. 雑用をする	8.76	3.00	
11. ぼーっとする	10.09	7.80	
12. その他	9.02	4.50	

親同居:親、家族と同居

独居:一人住まい

その他:兄弟だけで同居、寮生活など

―表66～表67 共通

D:理論的な標本特性値の差

d:実際の標本特性値の差

SD: significance difference

*: $p<0.05$

―表66～表67 共通

通っていたが、3つの選択肢で有意差が認められた。「パソコンをする」、「テレビ(ビデオ、ラジオを含む)を見る」と答えた親同居者の割合が独居者に比べて多く、「サークル活動をする」と答えたのは独居者の方が多かった。パソコンやテレビ、ビデオの所有状況もこの結果に関わるのではないかと考えたが、自宅の中にある所有物については今回調査していない。そこで、居住方法と欲しいものとのクロス集計を試みた。独居者より親と同居する者の方が、パソコンやテレビ、MDを欲しいと答えた割合が高かった。とくに、テレビ、MDを欲しいとする親同居者の割合は45.6%であった。親と同居しているからこそ一人で楽しむ機器を欲しがり、それらの機器を使って余暇を過ごす点、独居者においても、余暇は「テレビを見て過ごす」と答えた割合は50%を越えたが、親同居者よりその割合が低かった点、調査者はこれらの2点について予想することができなかった。今回調査対象の独居の大学生は、部屋で一人パソコンやテレビを見て過ごすばかりではなく、サークル活動、友人を部屋に招いてのおしゃべりなど、人との交流で余暇を過ごし、親との同居者はテレビを見る、あるいは、一人ぼーっとして過ごしていることが明らかとなった。

嗜好品の居住方法別利用状況の検定結果は、表67に示す。「酒」を「よく飲む」、「時々飲む」では独居者が、「全く飲まない」では親同居者が有意に高い回答率を得た(図11参照)。詳しい

表67 嗜好品の利用状況－
居住別クロス集計の検定結果

	親同居／独居		
	(n=182)	(n=170)	
	D	d(%)	SD
1. 酒			
a. よく飲む	5.92	-9.10	*
b. 時々	9.95	-12.60	*
c. あまり	9.59	9.30	
d. 全く飲まない	8.98	14.20	*

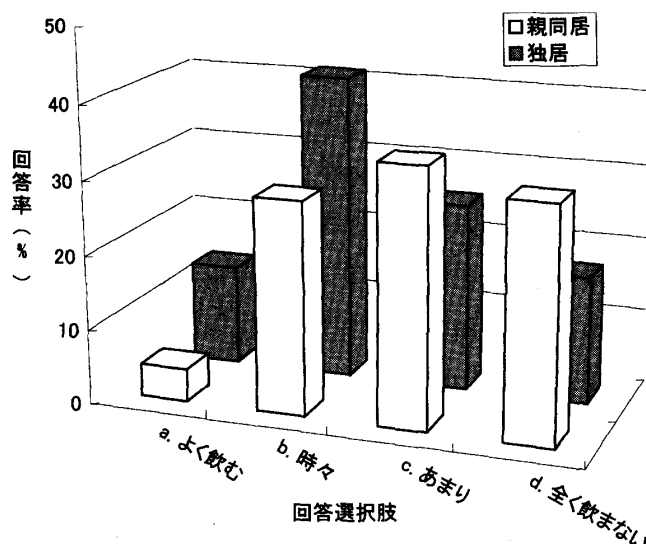


図11 嗜好品(酒)の利用状況—居住方法別クロス集計結果

内容は質問していないが、酒をよく飲むと回答した者は、一人で飲むのではなく友人などと飲んでいるであろうと推測される。この結果では、飲酒率の高さを重要視せず、飲酒率の高さは独居者が親しい友人関係を求めていることの現れであり、その飲酒がまた、友人関係を親密にしていくツールであることに着目すべきである。

3) 消費に関して

月平均の支出額についてのクロス集計検定結果は、表68の通りである。「食費」、「通信費」、「書籍購入費」のカテゴリーで居住方法間の有意差が認められた。食費については、独居の学生が、親同居の学生より多いという結果となり、これは調査者の予想の範囲であった。書籍（雑誌、コミックも含む）の購入額も、独居者のほうが、親同居者より多かった。通信費については、性、年齢、出身地の違いが説明要因と考えられる検定結果は得られなかったが、居住方法の相違による影響は見られた。前述した通り、親と同居する学生の方が、一人で過ごすことを好む傾向にあり、独居の学生の方が、友人との交流を盛んに行っている実態が明らかになった。カテゴリー表記を「通信費（携帯電話代など）」としたため、独居者の通信費すべてを友人への電話代と解釈することはできないが、これまでのクロス集計結果と併せて検討すると、独居者の友人との高い頻度の関わりがこの結果の背景にあると考えられる。

表68 月平均の支出額—
居住別クロス集計の検定結果

	親同居/独居		
	(n=182)	(n=170)	
	D	d(%)	SD
食費(昼食,コンパなどの外食,菓子代など)			
1. ~0.5万円	8.99	42.70	*
2. ~1万円	8.20	18.60	*
3. ~2万円	9.31	-28.10	*
4. 2万円~	8.68	-38.00	*
通信費(携帯電話代など)			
1. ~0.5万円	10.24	28.50	*
2. ~1万円	10.44	-20.80	*
3. 1万円~	5.36	-6.80	*
書籍購入費(雑誌,コミックも含む)			
1. 0万円	8.21	-5.30	
2. ~0.1万円	10.23	16.60	*
3. ~0.3万円	8.91	-2.80	
4. 0.3万円~	6.34	-9.80	*

親同居: 親、家族と同居

独居: 一人住まい

その他: 兄弟だけで同居、寮生活など

D: 理論的な標本特性値の差

d: 実際の標本特性値の差

SD: significance difference

*: $p < 0.05$

4) 意識に関して

人生の目標についての居住方法間の検定結果は、表69の通りである。ここまでの結果分析で、今回対象とした大学生が「自分らしく生きること」を人生の1番の目標にしており、男女では女子学生の方が、出身地別では鹿児島市外の鹿児島県内出身者に多いことを明らかにしたが、居住方法の相違でも回答に差が見られるものがあつた。独居者より親と同居している者の方が、より「自分らしく生きること」(40.1%)を望んでいた。それに対し、独居者の方は「お金や地位」と答えた者が10.0%と、親同居者の回答率より6.7%も高く特徴的な値を示した。おそらく、一人暮らしにおいて日々呈される日常の問題を解決する中で、現実的で即物的な事柄を重視するようになる者も現れたのだと考える。

大学が在る鹿児島市への愛着についてのクロス集計検定結果を、表70に示す。分類した3つの居住方法の学生とも、「好きである」の回答が50%を超えたが、親との同居者の19.8%が、

「もっと都会にあこがれる」と答えた。おそらく、この都会とは都会の繁華街ではなく、有名大学がひしめく関東や関西を指しているものと考えられる。鹿児島が嫌いということではなく、親元を離れ一人暮らしをしながら、都会の大学に通うことへの憧れを表した回答だと考えられる。

(5) 生活への満足感が説明要因と考えられる結果

1) 生活に関して

今回調査の全対象者369名に対し、生活の場面を、「衣・食・住における物質面」、「趣味、生きる目標などの心の面」、「安全、快適さなどの環境面」、「友人、親子関係などの対人面」の4カテゴリーに分け、それぞれの満足度を5段階で尋ねた。詳細は前報に示した通りであるが、その結果は、「物質面」では、「満足」が119名、「やや満足」が123名、「どちらでもない」が54名、「やや不満」が56名、「不満」が17名であつた。また、「心の面」では、「満足」が60名、「やや満足」が117名、「どちらでもない」が93名、「やや不満」が73名、「不満」が26名、「環境面」では、「満足」が104名、「やや満足」が130名、「どちらでもない」が80名、「やや不満」が47名、「不満」が8名、「対人面」では、「満足」が116名、「やや満足」が147名、「どちらでもない」が66名、「やや不満」が33名、「不満」が7名

表69 人生の目標—
居住別クロス集計の検定結果

	親同居/独居		
	(n=182)	(n=170)	
	D	d(%)	SD
1. 他人への誠実さや愛	7.81	0.50	
2. お金や地位	5.17	-6.70	*
3. やりがいのある仕事	8.95	2.40	
4. 束縛からの解放	2.92	-0.80	
5. 国家社会への貢献	1.93	0.50	
6. 国際協力への貢献	3.11	0.90	
7. 信仰	1.12	-0.60	
8. 自分らしく生きること	9.91	12.50	*
9. 何もない	4.48	-0.90	
10. その他	5.05	-5.00	

親同居: 親、家族と同居

独居: 一人住まい

その他: 兄弟だけで同居、寮生活など

*—表66～表67 共通

D: 理論的な標本特性値の差

d: 実際の標本特性値の差

SD: significance difference

*: $p < 0.05$

*—表69～表70 共通

表70 地域への愛着—
居住別クロス集計の検定結果

	親同居/独居		
	(n=182)	(n=170)	
	D	d(%)	SD
1. 好きである	10.41	7.60	
2. もっと都会にあこがれる	7.48	9.80	*
3. もっと田舎にあこがれる	4.60	-6.00	
4. 嫌いである	3.64	1.40	
5. なんとも思わない	7.86	-13.70	*
6. その他	4.35	2.00	

であった。今回のクロス集計では、4つの生活場面に対する評価のうち、「満足」と「やや満足」、「満足」と「やや不満」、「満足」と「不満」と回答した対象者間で、各質問に対する回答率を比較し、検定を行った。各生活場面に対する満足感の相違が、各質問の回答率の差を説明できるとみなされる結果について、以下に報告する。

ある生活場面に対する満足感が、他の生活場面の満足感に及ぼす影響をクロス集計した。その検定結果を、表71に示す。「物質面」、「心の面」、「環境面」のそれぞれに「満足」し

表71 生活に対する満足感—生活に対する満足感別クロス集計の検定結果									
物質面	満足／やや満足 (n=119) (n=123)			満足／やや不満 (n=119) (n=56)			満足／不満 (n=119) (n=17)		
	D	d(%)	SD	D	d(%)	SD	D	d(%)	SD
2. 趣味,生きる目標などの心の面									
a. 満足	10.35	23.80	*	13.88	24.70	*	23.32	27.70	*
e. 不満	4.53	0.10		8.35	-12.70	*	12.66	-26.00	*
3. 安全,快適さなどの環境面									
a. 満足	12.35	38.60	*	15.79	47.20	*	25.38	59.70	*
e. 不満	2.29	1.70		4.77	-1.90		10.45	-21.80	*
4. 友人,親子関係などの対人面									
a. 満足	12.33	31.10	*	15.74	37.60	*	25.41	43.70	*
e. 不満	2.25	0.00		4.73	-4.60		7.41	-11.00	*
心の面	満足／やや満足 (n=60) (n=117)			満足／やや不満 (n=60) (n=73)			満足／不満 (n=60) (n=26)		
	D	d(%)	SD	D	d(%)	SD	D	d(%)	SD
3. 安全,快適さなどの環境面									
a. 満足	15.22	33.50	*	16.47	45.30	*	23.01	38.60	*
e. 不満	4.04	-2.60		5.07	-4.10		6.94	-7.70	*
4. 友人,親子関係などの対人面									
a. 満足	15.53	35.00	*	16.82	52.20	*	22.99	58.50	*
e. 不満	3.35	0.80		5.06	-1.00		9.70	-9.80	*
環境面	満足／やや満足 (n=104) (n=130)			満足／やや不満 (n=104) (n=47)			満足／不満 (n=104) (n=8)		
	D	d(%)	SD	D	d(%)	SD	D	d(%)	SD
4. 友人,親子関係などの対人面									
a. 満足	12.74	32.90	*	17.14	50.00	*	35.59	48.10	*
e. 不満	2.36	1.90		5.53	-2.40		9.47	1.90	

D:理論的な標本特性値の差

d:実際の標本特性値の差

SD:significance difference

*: $p<0.05$

*—表71～表76 共通

ていると回答した対象者は、「心の面」、「環境面」、「対人面」に対して、「やや満足」、「やや不満」、「不満」と回答した者より、有意に満足感が高いことが明らかとなった。それに対し、「物質面」、「心の面」で「不満」と回答した対象者は、「心の面」、「環境面」、「対人面」のいずれにも有意で高い不満を示した。カテゴリーを細かく分けることなく俯瞰を試みると、満足している対象者は生活の多くの面に満足しているのに対し、不満を持つ者はあらゆる面に不満を持つ傾向にあった。今回の調査では判断の根拠を質問しなかったため、満足や不満の元となる要因を解析するのは困難である。ただ単に感受性が低いいため問題を正しく認知できず、簡単に満足感を感じている場合もあれば、過度の期待感が裏切られて不満に至っている場合も考えられる。大まかではあるが、ここに示した通り、生活に満足している者と不満を持つ者との間にある満足感に対する認知傾向の違いを把握しておく必要があると考える。

ある生活場面への満足感が、大学生活に対する満足感に及ぼす影響についてのクロス集計検定結果は、表72の通りである。「物質面」、「心の面」、「環境面」、「対人面」のいずれ

表72 大学生活に対する満足感—生活に対する満足感別クロス集計の検定結果

物質面	満足／やや満足 (n=119) (n=123)			心の面	満足／やや満足 (n=60) (n=117)		
	D	d(%)	SD		D	d(%)	SD
1. 大学の講義など学業全般				1. 大学の講義など学業全般			
a. 満足	5.68	10.90	*	a. 満足	7.51	8.30	*
2. 大学での友人,対人関係				2. 大学での友人,対人関係			
a. 満足	12.39	20.40	*	a. 満足	15.52	28.20	*
3. 大学の施設面				3. 大学の施設面			
a. 満足	9.36	13.70	*	a. 満足	11.98	18.00	*
4. 所属大学の学生であること				4. 所属大学の学生であること			
a. 満足	11.33	19.10	*	a. 満足	14.54	16.80	*
環境面	満足／やや満足 (n=104) (n=130)			対人面	満足／やや満足 (n=116) (n=147)		
	D	d(%)	SD		D	d(%)	SD
1. 大学の講義など学業全般				1. 大学の講義など学業全般			
a. 満足	5.70	9.80	*	a. 満足	5.07	10.30	*
2. 大学での友人,対人関係				2. 大学での友人,対人関係			
a. 満足	12.72	30.20	*	a. 満足	12.07	52.90	*
3. 大学の施設面				3. 大学の施設面			
a. 満足	9.98	25.80	*	a. 満足	9.09	16.40	*
4. 所属大学の学生であること				4. 所属大学の学生であること			
a. 満足	11.81	22.30	*	a. 満足	10.99	12.20	*

においても、「満足」と回答した対象者は、「やや満足」と回答した者より、大学生への満足感が有意に高かった。とくに、生活の「対人面」で「満足」している学生は、大学生活でも「対人面」に「満足」しており、その値は著しく高いものであった。また、生活の中での「心の面」、「環境面」に「満足」している対象者も大学での「対人関係」に「満足」している割合が高かった。このクロス集計結果でも、前述した満足感に対する認知の特徴的な傾向が確認できた。つまり、ある面で満足度が高い対象者は、大学生活の他の面に対しても満足感を得る傾向にあるということである。

各生活場面での満足感と生活の不安との間でクロス集計を行い、その検定結果を示したものは、表73である。生活場面での「心の面」に「満足」している対象者は、「自分の問題—能力」に不安を抱いており (50.0%)、逆に、「不満」を持っている者では、「自分の問題—性格」に不安が高かった (42.3%)。これらの2つの選択肢では、「満足」と「不満」の間に有意差が認められた。また、「不満」を持っている者は、「将来問題—結婚」に対しても、「心の面」で「満

表73 生活の不安(複数回答)—生活に対する満足感別クロス集計の検定結果

心の面	満足／不満 (n=60) (n=26)		
	D	d(%)	SD
1. 自分の問題			
a. 健康	14.74	11.20	
b. 性格	19.08	-29.00	*
c. 能力	22.78	23.10	*
d. 宗教	—	—	
e. その他	11.73	-17.50	*
6. 将来問題			
a. 職業	20.64	9.60	
b. 結婚	10.79	-13.70	*
c. 経済	18.72	7.90	
d. 家庭生活	8.40	-0.50	
e. その他	8.47	-6.00	
対人面	満足／やや満足 (n=116) (n=7)		
	D	d(%)	SD
1. 自分の問題			
a. 健康	30.24	20.70	
b. 性格	30.24	-55.00	*
c. 能力	37.93	1.90	
d. 宗教	—	—	
e. その他	11.80	2.60	
2. 家庭			
a. 家族	29.22	-41.60	*
b. 経済	34.98	-13.60	
c. その他	9.58	1.70	

足」を感じている者より不安を感じていた。生活場面での「対人面」は「不満」とする対象者は、「自分の問題－性格」、「家庭－家族」を不安としており、前者では74.4%、後者では57.1%と顕著に値が高かった。

友人との関係について尋ねた結果と生活への満足感とのクロス集計を検定した結果は、表74に示す。生活での「対人面」において、「満足」と「やや不満」と答えた対象者間に有意で顕著な差が見られた。「立ち入った付き合いは避けている」か、という質問について、「対人面」の「満足」者は、「いいえ」と回答した割合が高かった。「携帯やメールで頻繁に連絡しあう」、「よく休日に買い物や遊びに行く」、「互いの家に行き行って話をする」か、との質問については、「対人面」に「やや不満」を感じている者が「いいえ」と答えた。「学校で話をする」、「よく休日に買い物や遊びに行く」、「互いの家に行き行って話をする」のかについては、「対人面」に「満足」している者の方が「はい」と答えた。

親との会話の内容に対して各生活場面での満足感が及ぼす影響を検定した結果は、表75である。生活の「心の面」で不満を持っている対象者は、「勉学や進学など学校生活について」、「健康のことについて」、「友人、異性関係について」、「家庭、家庭外での日常生活について」、親と「全く（話を）しない」と回答し、「満足」している者と有意な差が見られた。とくに、「友人、異性関係について」は「全く（話を）しない」とする者の割合は著しく異なり、「満足」者は11.7%であったのに対し、「不満者」は53.8%であった。表には示していないが、「環境面」で「不満」を持つ者に同様の結果が見られ、「勉学や進学など学校生活について」、「友人、異性関係について」、「家庭、家庭外での日常生活について」、「芸能、スポーツなどの話題について」は「全く（話を）しない」という回答が高い値を示した。

親から言われたことと生活への満足感との間のクロス集計検定結果は、表76の通りである。クロス集計結果を概観して明らかになった点は、親から言われたことを8つに分類したカテゴリー全てにおいて、4つの生活場面に「満足」している対象者は、「よく言われた」と回答しているのに対し、「不満」がある者は、「全く言われなかった」と答えた率が

表74 友人関係－
対人面の満足感別クロス集計の検定結果

	満足／やや不満 (n=116) (n=33)		
	D	d(%)	SD
1. 立ち入った付き合いは避けている			
a. はい	11.97	-9.60	
b. いいえ	19.18	21.80	*
c. どちらでもない	17.97	-10.10	
3. 携帯やメールで頻繁に連絡しあう			
a. はい	18.51	10.60	
b. いいえ	17.86	-18.80	*
c. どちらでもない	18.07	10.30	
4. 学校で会って話をする			
a. はい	14.68	16.50	*
b. いいえ	11.27	-3.50	
c. どちらでもない	10.13	-10.00	
5. よく休日に買い物や遊びに行く			
a. はい	17.86	24.10	*
b. いいえ	18.43	-33.00	*
c. どちらでもない	18.16	11.10	
6. 互いの家に行き行って話をする			
a. はい	19.06	26.20	*
b. いいえ	18.35	-22.20	*
c. どちらでもない	16.22	-1.80	

表75 親との会話－
心の面の満足感別クロス集計の検定結果

	満足／不満 (n=60) (n=26)		
	D	d(%)	SD
1. 勉学や進学など学校生活について			
a. よくする	20.89	36.20	*
c. 全くない	14.07	-23.60	*
2. 健康のことについて			
c. 全くない	19.44	-27.30	*
3. 友人、異性関係について			
c. 全くない	19.77	-42.10	*
4. 家庭、家庭外での日常生活について			
c. 全くない	10.79	-13.70	*

高かったことである。そのうち、有意差が認められ、かつ、顕著な差がある集計結果を表76に整理した。親との会話の内容に対してのクロス集計結果とも併せて見出された特徴は、生活場面で不満を持つ対象者は、親との会話が乏しく、親からの言葉でのしつけを記憶していない点にある。換言すると、親との言葉での交流が貧弱であった者は、生活に対する不満感の程度が高い。家庭環境とりわけ親の役割が、若年層の心身の発達に与える影響は大きい。親の要求と子どもの応答性がマッチングすることが前提であろうが、親が口うるさく言うことや言葉によるしつけは、子どもを大切に想う親の隠れたメッセージを伴って子どもに伝わっていると推察できる。親の養育態度と子どもの成長に関する研究においてしばしば指摘されることに、無関心型の親に育てられた子どもは自尊心感情の取得が困難だとされている点がある。生活に対する満足度の高さの背景にあるものが、対象者自身の自尊心の高さによるものと仮定すると、親から言われた頻度の高さは、親の子どもへの関心の高さであり、そのことは子どもの自立を促し、自尊心感情を育む。育まれた自尊心の高さが、生活に対する満足感の高さに繋がったと解釈できる。

2) 身体に関して

生活への満足感と心身の状態を5つのカテゴリーに分けての質問間でのクロス集計を検定した結果は、表77に示す。生活の中の「心の面」と「環境面」で「不満」がある対象者は、「何かする気力がない」、「責任のあることに関わりたくない」、「イライラする」ことが「よくある」と回答する者が多く、「満足」している対象者の回答とは顕著な有意差が認められた。また、「対人面」に「不満」がある対

表76 親から言われたこと—
生活に対する満足感別クロス集計の検定結果

物質面	満足／不満		
	(n=119) (n=17)		SD
	D	d(%)	
1. 個性的であること			
d. 全く言われなかった	22.41	-23.60	*
2. 我慢して努力し続けること			
d. 全く言われなかった	19.38	-26.90	*
3. 他人に対して平等であること			
d. 全く言われなかった	21.08	-28.60	*
4. 他人の迷惑にならないこと			
d. 全く言われなかった	15.92	-21.00	*
5. 人や物事に対して平等であること			
d. 全く言われなかった	17.99	-30.30	*
7. 自分にも他人にも正直であること			
d. 全く言われなかった	17.23	-25.20	*
心の面	満足／不満		
	(n=60) (n=26)		SD
	D	d(%)	
5. 人や物事に対して平等であること			
d. 全く言われなかった	15.93	-18.60	*
8. 明るく朗らかであること			
d. 全く言われなかった	17.92	-22.90	*
環境面	満足／不満		
	(n=104) (n=8)		SD
	D	d(%)	
4. 他人の迷惑にならないこと			
d. 全く言われなかった	18.55	-19.20	*
5. 人や物事に対して平等であること			
d. 全く言われなかった	19.58	-31.70	*

表77 心身の状態—
生活に対する満足感別クロス集計の検定結果

心の面	満足／不満		
	(n=60) (n=26)		SD
	D	d(%)	
3. 何かする気力がない			
a. よくある	21.35	-26.70	*
4. 責任のあることに関わりたくない			
a. よくある	19.78	-25.60	*
5. イライラする			
a. よくある	15.93	-18.60	*
環境面	満足／不満		
	(n=104) (n=8)		SD
	D	d(%)	
3. 何かする気力がない			
a. よくある	26.43	-36.50	*
4. 責任のあることに関わりたくない			
a. よくある	25.80	-37.50	*
5. イライラする			
a. よくある	23.80	-26.90	*
対人面	満足／不満		
	(n=116) (n=7)		SD
	D	d(%)	
2. なんとなく体がだるい			
a. よくある	33.46	-63.30	*
3. 何かする気力がない			
a. よくある	28.71	-57.60	*
5. イライラする			
a. よくある	21.80	-66.20	*

D: 理論的な標本特性値の差

d: 実際の標本特性値の差

SD: significance difference

*: $p < 0.05$

象者も、「なんとなく体がだるい」、「何かする気力がない」、「イライラする」ことが「よくある」割合が、いずれも70%を超えた。

3) 意識に関して

将来への見通しを尋ねた結果と生活に対する満足感とのクロス集計検定結果は、表78の通りである。「心の面」に「満足」してい

る対象者では、「明るいような気がする」と回答した割合が45.0%と最も高く、

「不満」がある対象者は、「将来のことは全く想像できない」と回答する者が最も高く26.9%であった。この2つの選択肢

に有意差が見られた他に、「暗いような気がする」で有意差が認められ、「心の面」で「不満」を持つ者による回答率が、

「満足」している者の回答率より有意に高かった。また、生活の「対人面」に対して「満足」、「不満」とした回答者間で

見られた傾向は、「心の面」での「満足」と

「不満」の回答者の違いと似通っていた。

詳細に数値を比較すると顕著な差が見ら

れ、将来が「明るいような気がする」のは、「対人面」に対して「不満」を持っている対象者では0%、「満足」している者は40.5%、「暗いような気がする」のは、「不満」を持っている対象者では28.6%、「満足」している者では0.9%であった(図12参照)。

表78 将来—生活に対する満足感別クロス集計の検定結果

心の面	満足／不満 (n=60) (n=26)		
	D	d(%)	SD
1. 明るいような気がする	22.24	25.80	*
2. なんとなく明るいような気がする	19.44	5.80	
3. 暗いような気がする	10.79	-13.70	*
4. なんとなく暗いような気がする	8.40	-0.50	
5. 明るい暗いはわからない	13.37	7.90	
6. 将来のことは全く想像できない	16.48	-16.90	*
7. その他	9.67	-4.40	

対人面	満足／不満 (n=116) (n=7)		
	D	d(%)	SD
1. 明るいような気がする	37.06	40.50	*
2. なんとなく明るいような気がする	34.69	-14.50	
3. 暗いような気がする	11.85	-27.70	*
4. なんとなく暗いような気がする	13.44	3.40	
5. 明るい暗いはわからない	21.79	9.50	
6. 将来のことは全く想像できない	26.97	-14.80	
7. その他	11.80	2.60	

D:理論的な標本特性値の差
d:実際の標本特性値の差
SD:significance difference
*: $p<0.05$
—表78～表84 共通

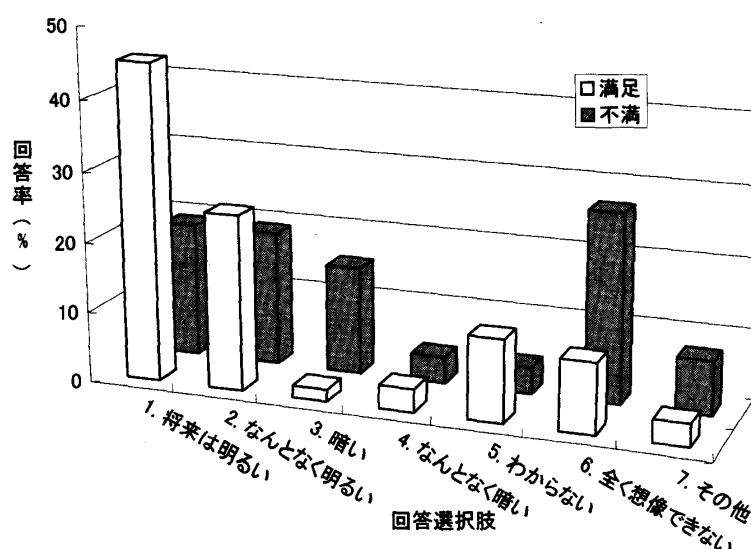


図12 将来—生活心の面に対する満足感別クロス集計結果

自己評価に対して生活への満足感が影響を及ぼすかについてクロス集計し、検定を行っ

た結果は、表79である。7つのカテゴリーについて自己を5段階評価した結果であったが、生活の「心の面」に「不満」を持つ対象者は、自分を「正直」、「責任感」、「創造的」、「積極的」、「協調性」であると「思わない」と回答した。その割合は20%近く、「心の面」に「満足」している者では5%以下であったため、際立った差が見られた。先に考察した中で、親の養育態度に関連して、調査対象者の自尊心感情と生活に対する満足感との高い相関を仮定した。自己評価も自尊心感情と強い関連があると思われる。このクロス集計結果から、生活（の心の面）への不満は自尊心感情の低さがそのベースをなしており、それが自己評価の低さにも繋がっていると考えられる。

自分が働かなければならない理由を尋ねた結果と生活に対する満足感とのクロス集計の検定結果は、表80に、関連して、就職に対する意識についての結果は、表81に示す。生活

表80 労働観—
心の面の満足感別クロス集計の検定結果

	満足／不満 (n=60) (n=26)		
	D	d(%)	SD
1. 日々の生きる糧を得るため	22.95	-11.50	
2. 将来の基盤となるお金を得るため	9.71	6.70	
3. 日本の財政や社会保障を支えるため	6.94	-7.70	*
4. そのとき欲しいものを買うため	0.00	0.00	
5. 生きがい	10.78	2.90	
6. まわりが働いているから	6.94	-7.70	*
7. 夢や自己実現のため	20.36	21.80	*
8. その他	8.40	-0.50	

表79 自己評価—
心の面の満足感別クロス集計の検定結果

	満足／不満 (n=60) (n=26)		
	D	d(%)	SD
1. 正直である e. 思わない	11.73	-17.50	*
2. 責任感がある e. 思わない	12.56	-15.90	*
3. 創造的である e. 思わない	10.79	-13.70	*
4. 積極的である e. 思わない	13.36	-14.20	*
5. 協調性がある e. 思わない	11.71	-12.10	*

表81 就職に対する意識—
心の面の満足感別クロス集計の検定結果

	満足／不満 (n=60) (n=26)		
	D	d(%)	SD
1. 就きたい職業を決めているか a. はい	22.50	26.00	*
b. いいえ	22.38	-22.10	
2. 就職のために何かしているか a. はい	21.36	28.50	*
b. いいえ	21.76	-26.30	*

の「心の面」で「満足」している者も、「不満」を持つ者も、働く理由の1位に挙げたのは「日々の生きる糧を得るため」で、いずれも50%を超えた。いずれ対象者も、2位は「夢や自己実現のため」であったが、回答率は異なり、有意差が現れた。また、「日本の財政や社会保障を支えるため」と「まわりが働いているから」の2選択肢は、「心の面」に「不満」を感じている者では理由に挙げたが、「満足」している者ではいずれも0%であった。就職に対する意識では、「心の面」で「満足」している対象者は、大学1年ないしは2年生の段階で「就きたい職業を決め」ており、さらに、「就職のために何かしている」と答えた者が40%もいた（図13参照）。

生活志向が個人に向いているか、社会に向いているかを尋ね、生活に対する満足感との関わりを検定した結果は、表82の通りである。生活の「心の面」に「満足」している対象者は、「自分自身の生活を充実させることが大切である」（58.3%）と、生活の志向が個人

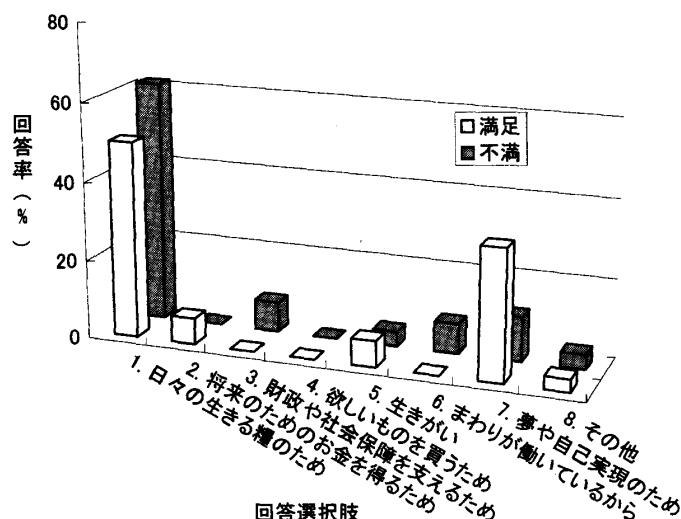


図13 労働観—生活の心の面に対する満足感別クロス集計結果

表82 生活志向—
心の面の満足感別クロス集計の検定結果

	満足／不満	
	(n=60)	(n=26)
	D	d(%) SD
1. 自分自身の生活を充実させることが大切である	23.00	31.40 *
2. 自身の生活の充実だけでなく社会のために役立つこともしたい	20.64	-9.60
3. 何も考えずに生活している	17.47	-8.10
4. その他	9.70	-9.80 *

に向いていたのに対し、有意差は認められなかったが、「不満」を持つ者は、「自身の生活の充実だけでなく社会のために役立つこともしたい」(34.6%)と社会に目が向けられた生活志向が見られた。

地域への愛着と生活に対する満足感とのクロス集計検定結果を、表83に示す。生活の中の「環境面」に「満足」している対象者で、

大学のある鹿児島市を「好きである」と答えたのは63.5%で、この値は、他の生活場面で

「満足」と答えた対象者の値とほぼ同じであった。しかし、「環境面」で「不満」のある者では、鹿児島市を「好き」であると答えた割合は12.5%で、有意に低い結果であった。

他の生活場面に「不満」を感じている者にはこのような回答は見られず、特徴のある結果となった。

実際の過ごし方ではなく、ゆとりの時間をどのように過ごしたいかという希望と、生活に対する満足感との間でクロス集計を試みた。その検定結果は、表84の通りである。生活の中の「対人面」で「満足」と「不満」を持つ対象者の間において、回答に顕著な有意差が現れた。「満足」している対象者は、ゆとりの時間を「趣味や遊びに使う(使いたい)」

表83 地域への愛着—
環境面の満足感別クロス集計の検定結果

	満足／不満	
	(n=104)	(n=8)
	D	d(%) SD
1. 好きである	35.25	51.00 *
2. もっと都会にあこがれる	25.19	-11.50
3. もっと田舎にあこがれる	13.37	-9.60
4. 嫌いである	13.37	-9.60
5. なんとでもない	23.78	0.00
6. その他	16.18	-7.70

(65.5%)と答え、「不満」を持つ対象者は、「家庭生活を豊かにするために使う(使いたい)」(42.9%)と回答した(図14参照)。

表84 ゆとり時間の使い方
対人面の満足感別クロス集計の検定結果

	満足/不満 (n=116) (n=7)		
	D	d(%)	SD
1. 趣味や遊びに使う	36.91	51.20	*
2. 家庭生活を豊かにするために使う	18.80	-38.60	*
3. 研究や勉強に使う	21.75	-5.70	
4. 社会奉仕・ボランティアのために使う	11.80	2.60	
5. アルバイトを増やす	26.30	-15.70	
6. その他	16.47	5.20	

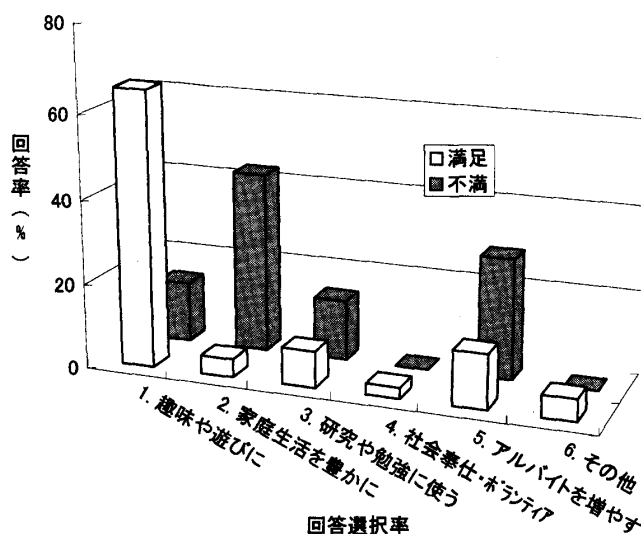


図14 ゆとり時間の使い方
生活の対人面に対する満足感別クロス集計結果

(6) 大学生活への満足感が説明要因と考えられる結果

1) 生活に関して

今回調査の全対象者369名に対し、大学生活を、「大学の講義など学業全般」、「大学での友人、対人関係」、「大学の施設面」、「所属大学の学生であること」の4カテゴリーに分け(以下、「学業面」、「対人面」、「施設面」、「所属面」と表記する)、それぞれの満足度を5段階で尋ねた。詳細は前報に示したが、その結果は、「学業面」では、「満足」が14名、「やや満足」が101名、「どちらでもない」が127名、「やや不満」が96名、「不満」が30名であった。また、「対人面」では、「満足」が121名、「やや満足」が125名、「どちらでもない」が86名、「やや不満」が31名、「不満」が4名、「施設面」では、「満足」が52名、「やや満足」が134名、「どちらでもない」が128名、「やや不満」が41名、「不満」が13名、「所属面」では、「満足」が90名、「やや満足」が102名、「どちらでもない」が132名、「やや不満」が33名、「不満」が11名であった。今回のクロス集計では、大学生活の4つの側面に対する評価のうち、「満足」と「やや満足」、「満足」と「やや不満」、「満足」と「不満」と回答した対象者間で、各質問に対する回答率を比較し、検定を行った。大学生活の各側面に対する満足感の相違が、それぞれの質問の回答率の差を説明できるとみなされる結果について、以下に報告する。

大学生活の一つの面に対する満足感が、他の大学生活の側面への満足感に及ぼす影響をクロス集計した。検定結果は、表85の通りである。前述した各生活場面に対するそれぞれの満足感のクロス集計と同傾向の結果となった。つまり、大学生活を「満足」していると回答した対象者は、「やや不満」、「不満」を持っている対象者より、大学生活のいずれの側面においても満足度が高いということが明らかになった。本報告の目的でも触れたが、最

表85 大学生生活に対する満足感—大学生生活に対する満足感別クロス集計の検定結果

学業面	満足／やや満足 (n=14) (n=101)			満足／やや不満 (n=14) (n=96)			満足／不満 (n=14) (n=30)		
	D	d(%)	SD	D	d(%)	SD	D	d(%)	SD
2. 大学での友人,対人関係									
a. 満足	27.95	48.30	*	25.24	74.10	*	31.20	76.20	*
e. 不満	5.17	7.10		7.41	6.10		13.16	3.80	
3. 大学の施設面									
a. 満足	23.70	22.10		18.11	35.60	*	27.48	26.20	
e. 不満	7.31	6.10		9.15	5.00		24.45	-16.20	
4. 所属大学の学生であること									
a. 満足	27.56	33.80	*	21.21	62.00	*	29.54	58.10	*
e. 不満	7.34	-2.00		0.00	0.00		24.48	-26.70	*
対人面	満足／やや満足 (n=121) (n=125)			満足／やや不満 (n=121) (n=31)			満足／不満 (n=121) (n=4)		
	D	d(%)	SD	D	d(%)	SD	D	d(%)	SD
3. 大学の施設面									
a. 満足	9.49	17.60	*	16.77	13.50		43.45	26.40	
e. 不満	4.45	3.40		8.84	-1.50		22.98	-20.00	
4. 所属大学の学生であること									
a. 満足	11.51	18.10	*	18.72	26.80	*	48.63	14.70	
e. 不満	4.15	0.90		7.03	0.10		19.51	-21.70	*
施設面	満足／やや満足 (n=52) (n=134)			満足／やや不満 (n=52) (n=41)			満足／不満 (n=52) (n=13)		
	D	d(%)	SD	D	d(%)	SD	D	d(%)	SD
4. 所属大学の学生であること									
a. 満足	15.63	28.30	*	19.71	52.30	*	30.36	36.50	*
e. 不満	4.61	-0.30		5.90	-0.50		17.58	-36.60	*

D: 理論的な標本特性値の差

d: 実際の標本特性値の差

SD: significance difference

*: $p < 0.05$

*—表85～表87 共通

近の大学生の学問重視傾向とその影響を浮上させることを目的に、今回の報告ではクロス集計を行う質問項目として、大学生活への満足感を選定した。6年間の大学生の生活と意識の変化を調査した武内清（上智大学）によれば、「大学生活の比重」に関しては、「部活・サークル」の比重は減少して（1997年60.0%から2003年56.6%）、「学業・勉強」の比重が高まったという（97年50.7%から03年55.9%）。また、「大学生活に対する満足度」も6年間で上がったこと、中でも、「先生との関係（教員の指導）」に対する良好度の上昇が、授業満足度を高めていることを指摘している。武内はその現象をもたらした原因を2点挙げ、一つは昨今の教育重視の大学改革の成果、もう一つは就職難の時期の学生の一時的対応によるものと考えている。いずれにしても、学生の勉強志向やまじめ化傾向を、「出席重視」、「教員の指導」を求める調査結果から、中学・高校生の延長線上にある「生徒化」した大学生の脆弱化と捉え、懸念を示している（日本経済新聞 2004/10/23）。この武内の示唆は、2004年9月に日本教育学会での発表をもとにしたものだが、同じ学会で、まじめに勉学に取り組む大学生の増加を指摘する発表が相次いだという。秦政春（大阪大学）の調査（全国20大学を対象）によると、90年代初めと比較して勉強時間が20分ほど長くなっているという。そして、ストレスを感じている大学生は、「とても」、「やや」を合わせて8割近いという結果を出している。それらの結果から、一般に「ストレス＝人間関係」といわれるが、大学生の場合はそれに当てはまらず、勉強（勉強についていけないこと）がス

トレスの原因だと結論付けている(日本経済新聞 2004/10/16)。また、それを裏付けるような二つの国際調査結果が出された。経済協力開発機構(OECD)の「学習到達度調査」(PISA)と国際教育到達度評価学会(IEA)の「国際数学・理科教育動向調査」(TIMSS2003)である。PISA、TIMSSとも、日本の小学生と中学生の学力低下を示した。さらに、日本人の子どもの勉強時間の減少と、勉強嫌いの増加を指摘している(日本経済新聞 2004/12/18)。しかし、個々の説明の詳細は以下で行うが、今回調査のクロス集計の検定結果では、学業に対する満足度より大学での対人面への満足感の方が、他の質問項目への影響が大きかった。ただ、先に示した通り今回の調査では、大学生活の対人面に「満足」している者は121名であったのに対し、学業面に「満足」しているのは14名と少なく、「やや満足」している対象者と合わせても115名であった。また本報告の最初に、生活の不安についての質問で、今回調査した対象者の7割以上が勉学に不安を感じているとの結果も出した。学業の目的として、実学志向、つまり就職やこれからの社会生活に役立つ現実的なスキルを求めている点は、先の2つの大学生調査の結果と共通している。今回の調査結果では、大学での良好な対人関係に隠れて学業面から派生する問題が顕わになっていないが、幅広い知識や教養、実社会で役に立つ技術や知識など学生の求める教育内容や質に対し、今回、調査対象とした大学は適切なプログラムを構築していくことを考慮すべきである。それを怠れば、他大学のように学業面への不満が、他の事柄へも波及していくことが考えられる。

親友の有無についての質問結果と大学生活への満足感との間でクロス集計し検定した結果は、表86に示す。いずれの対象者においても、最も多かった回答は、親友は「少ないがいる」であったが、大学生活における「対人面」で「満足」している対象者の33.9%は、親友が「たくさんいる」と答え、「やや不満」と回答した者では3.2%であった。「親友も友人も少ない」と答えたのは、「対人面」で「満足」している対象者で0%だったのに対し、「やや不満」と回答した者は12.9%で、それぞれの回答比に有意差が認められた(図15参

表 86 親友の有無—大学生活対人面の満足感別クロス集計の検定結果

	満足/やや不満 (n=121) (n=31)		
	D	d(%)	SD
1. たくさんいる	17.64	30.70	*
2. 少ないがいる	19.03	-13.90	
3. 親友はいないが友人はたくさんいる	9.79	-3.90	
4. 親友も友人も少ない	6.31	-12.90	*
5. 親友も友人もない	0.00	0.00	
6. その他	0.00	0.00	

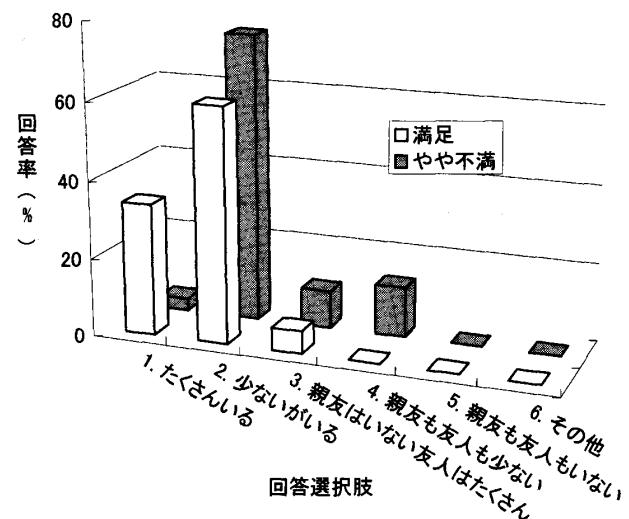


図15 親友の有無—大学生活の対人面に対する満足感別クロス集計結果

照)。親友の有無に対するクロス集計の検定結果では、ここまで性別や年齢などの影響は見られなかった。大学生生活の対人面に不満があるから親友や友人が少ないのではなく、親友や友人が少ないことが、大学生生活の対人面への不満をもたらしていると考えられる。

友人関係について大学生生活への満足感が影響したと考えられる検定結果は、表87に示す。大学生生活の「対人面」に「満足」している対象者に比べ「不満」を持つ者は、「相手に嫌われないように気をつけている」、「携帯やメールで頻繁に連絡しあう」、「学校で会って話をする」、「よく休日に買い物や遊びに行く」ことをしないとした割合が著しく高く、有意差が認められた。ここでも、大学生生活の対人面へ不満を持つ者の友人関係における行動様式に特徴が見られた。先の親友についての結果でも明らかになったように、友人や親友が少ないことも一端に挙げられるが、友人と身近なコミュニケーションを取ることを拒んでいるような印象を受ける。

2) 身体に関して

心身の状態に関する質問結果と大学生生活への満足感との間でクロス集計を行った。検定の結果は、表88の通りである。大学生生活の「学業面」、「対人面」、「所属面」で「やや不満」あるいは「不満」と回答した対象者は、「なんとなく体がだるい」、「何かする気力がない」、「責任あることに関わりたくない」、「イライラする」といったカテゴリーにおいて、「満足」している者より「よくある」とする回答が多かった。不定愁訴は、中学生にも見られる現象である。しかも、大人の想像以上に子どもたちは疲れやイライラを訴えているという調査結果が出され¹⁶⁾、前田は、中学生の不健康な生活習慣や食生活が身体面に影響を与えているとしている。大学生生活を送る中で、食事や睡眠などが不十分で身体の状態がうまくかみ合わないことが、大学生生活への不満に繋がることも考えられるが、一般的には、大学生の年齢であれば、気持ちと体の状態は相互に影響し合っていると思われる。大学の施設面に不満を感じる者以外は、大学生生活への不満と心身の状態との密接な相関が考えられる。

表87 友人関係—大学生生活対人面の満足感別クロス集計の検定結果

	満足／不満 (n=121) (n=4)		
	D	d(%)	SD
2. 相手に嫌われないように気をつけている b. いいえ	45.81	-46.10	*
3. 携帯やメールで頻繁に連絡しあう b. いいえ	44.70	-48.60	*
4. 学校で会って話をする b. いいえ	25.77	-44.20	*
5. よく休日に買い物や遊びに行く b. いいえ	45.48	-72.70	*

表88 心身の状態—大学生生活に対する満足感別クロス集計の検定結果

	満足／不満 (n=14) (n=30)		
	D	d(%)	SD
2. なんとなく体がだるい a. よくある	30.89	-35.70	*
3. 何かする気力がない a. よくある	30.51	-42.90	*
5. イライラする a. よくある	28.26	-29.60	*
対人面	満足／やや不満 (n=121) (n=31)		
	D	d(%)	SD
2. なんとなく体がだるい a. よくある	18.23	-22.00	*
3. 何かする気力がない a. よくある	15.70	-15.80	*
4. 責任のあることに関わりたくない a. よくある	14.62	-15.80	*
5. イライラする a. よくある	12.45	-26.50	*
所属面	満足／不満 (n=90) (n=11)		
	D	d(%)	SD
2. なんとなく体がだるい a. よくある	29.36	-34.70	*
3. 何かする気力がない a. よくある	24.96	-38.90	*

D: 理論的な標本特性値の差

d: 実際の標本特性値の差

SD: significance difference

*: $p < 0.05$

3) 意識に関して

将来の見通しを尋ねた結果に及ぼす大学生活の満足感についてクロス集計し検定した結果は、表89である。「対人面」と「所属面」に「不満」を感じている対象者の回答は、「将来のことは全く想像できない」が最も多く、

「満足」している者との間にも有意差が認められた。大学での対人面や所属面への不満は、将来への見通しも閉ざす結果となった。

自己評価と大学生活の満足感との間のクロス集計検定結果は、表90に示す。「対人面」に「不満」を持つ対象者は「満足」している対象者に比べ、「正直」、「責任感」、「創造性」、「協調性」、「個性」についての自己評価が低く、「(そう) 思わない」と答えた割合が有意に高かった。先に、自己評価と自尊心感情の取得について言及したが、自己評価は字のごとく自分で自分を評価しているのではなく、自分を他者と比較する「社会的比較」(Festinger, 1954)によって、他者による見方や評価を取り入れることが多いとされている。高田は、大学生は30歳代以降の成人より、「同年齢の他者」を基準に自己を評価するとしている¹⁷⁾。そのため、前述の親友や友人関係での結果と先行研究結果とを併せて考える必要がある。自己評価には心理的距離の近い友人が必要であるのに、対人面に不満がある対象者は友人が少ない。その上、自尊心感情の取得も充分でないと思われる。5つのカテゴリーにおいて自己評価が低くなった結果は、対人面への不満が直接影響したのではなく、自己認識に必要な介在する友人や他者が限られたためだと考えられる。

働く理由を質問した結果と大学生活に対する満足感とのクロス集計検定結果は、表91の通りである。大学生活の「学業面」に「満足」している対象者の50.0%が、働く理由を「夢や自己実現のため」と回答した。「学業面」に「やや満足」、「やや不満」、「不満」の対象者とは有意な差が認められ、とくに

表89 将来一大学生活に対する満足感別クロス集計の検定結果

	満足／不満 (n=121) (n=4)		
	D	d(%)	SD
対人面			
1. 明るような気がする	46.48	33.10	
6. 将来のことは全く想像できない	39.86	-56.80	*
所属面			
1. 明るような気がする	29.80	28.70	
6. 将来のことは全く想像できない	23.41	-32.20	*

D: 理論的な標本特性値の差

d: 実際の標本特性値の差

SD: significance difference

*: $p < 0.05$

―表89～表93 共通

表90 自己評価一大学生活対人面の満足感別クロス集計の検定結果

	満足／不満 (n=121) (n=4)		
	D	d(%)	SD
1. 正直である			
e. 思わない	15.39	-23.30	*
2. 責任感がある			
e. 思わない	19.57	-47.50	*
3. 創造的である			
e. 思わない	25.77	-44.20	*
5. 協調性がある			
c. どちらでもない	40.97	-55.20	*
7. 个性的である			
e. 思わない	25.77	-44.20	*

表91 労働観一大学生活学業面の満足感別クロス集計の検定結果

	満足／不満 (n=14) (n=30)		
	D	d(%)	SD
1. 日々の生きる糧を得るため	31.59	-14.30	
7. 夢や自己実現のため	26.59	40.00	*

「不満」と回答した者とは、40.0%の顕著な差が現れた。これは夢を実現させることと大学での学業が結びつき、大学での勉強が夢に貢献していることがもたらした結果であると

考えられる。

大学生生活に対する満足感が鹿児島市に対する愛着に影響を与えたと考えられる結果の検定については、結果を表92に示す。大学生生活の「対人面」に「満足」、「不満」を感じている対象者間で有意差が認められた選択肢があった。「対人面」に「満足」している者で鹿児島市を「嫌いである」と答えた割合は、1.7%と際立って低かった。大学生生活の4つの面に「満足」していると回答した対象者の過半数は、鹿児島市を「好きである」と回答した。とくに、「施設面」と「所属面」に「満足」している者と「不満」がある者との間で著しい差が見られ、いずれも38.4%の差となった。

望むゆとり時間の過ごし方と大学生生活に対する満足感とのクロス集計検定結果は、表93の通りである。「学業面」に「満足」している対象者の64.3%が「趣味や遊びに使う」と答え、「研究や勉強に使う」と回答した者は0%であった。「不満」を持つ者とは、それぞれ34.3%、23.3%の有意な差が現れた。これは、前者が現実の普段の大学生生活で十分に研究や勉強をしているためであると推測される。

4. 要約

鹿児島市にある国立大学と公立短期大学に在籍する大学生を対象に、生活、身体、文化、消費についての実態と意識に関して質問紙調査を行った。前報では、全ての質問項目について単純集計を行い、各回答結果をまとめた。本報告では、性別、年齢、出身地、居住方法、生活に対する満足感、大学生生活に対する満足感によるクロス集計を行い、前報での回答内容を説明できる要因を捉えることを試みた。その結果は次の通りである。

- 1) 性が説明要因と考えられる結果：多くの質問項目の回答差に性の違いによる影響が見られた。生活については、まず、生活時間に男女差が見られ、学業やアルバイトの目的、友人関係、生活の不安、親子関係、食生活にも差が現れた。身体については、ボディイメージの捉え方に著しい違いがあった。文化については、余暇の過ごし方、雑誌の購読、スポーツ、嗜好品に対する回答に男女の違いが影響した。消費については、まず、月平均の支出額、所有物、欲しいもの、購入の際の判断基準、貯蓄に関する質問に関して男

表92 地域への愛着—大学生生活に対する満足感別クロス集計の検定結果

対人面	満足／不満 (n=121) (n=4)		
	D	d(%)	SD
1. 好きである	48.26	38.60	
2. もっと都会にあこがれる	34.99	14.90	
3. もっと田舎にあこがれる	24.40	-19.20	
4. 嫌いである	15.39	-23.30	*
5. なんとも思わない	31.36	-14.30	
6. その他	15.31	2.50	
施設面	満足／不満 (n=52) (n=13)		
	D	d(%)	SD
1. 好きである	29.57	38.40	*
2. もっと都会にあこがれる	19.96	-13.50	
3. もっと田舎にあこがれる	10.43	3.80	
4. 嫌いである	10.47	-5.80	
5. なんとも思わない	23.60	-25.00	*
6. その他	7.44	1.90	

表93 ゆとり時間の使い方—大学生生活学業面の満足感別クロス集計の検定結果

	満足／不満 (n=14) (n=30)		
	D	d(%)	SD
1. 趣味や遊びに使う	31.19	34.30	*
2. 家庭生活を豊かにするために使う	18.22	-13.30	
3. 研究や勉強に使う	23.19	-23.30	*
4. 社会奉仕・ボランティアのために使う	9.43	7.10	
5. アルバイトを増やす	24.47	-5.70	
6. その他	21.76	1.00	

- 女間で異なる回答結果を得た。意識については、多くの項目で差が見られ、価値観、人生の目標、規範意識、生きがい、社会、結婚に対してであった。とくに、結婚観や配偶者の結婚後の働き方に対しては、現在の状況や社会背景も反映されていた。
- 2) 年齢が説明要因と考えられる結果：年齢差が1歳刻みであったため、有意差が認められる質問項目は少ないと予想していたが、生活、文化、消費、意識に関して相違が現れた。生活については生活時間や生活に対する満足感、学業の目的、生活の不安に対して違いが見られた。文化については、観戦するスポーツの種類と嗜好品のタバコの利用が年齢によって相違した。消費は、月平均の支出額が異なった。意識については、自己像と規範意識に年齢差が現れた。
- 3) 出身地が説明要因と考えられる結果：出身地の違いによる回答差がみられた質問項目は、生活と意識に関してであった。生活については、生活および大学生活に対する満足感、生活の不安、親子関係で違いが見られた。意識では、価値観、人生の目標、地域への愛着、配偶者に望む働き方について、出身地による考え方の相違が現れた。
- 4) 居住方法が説明要因と考えられる結果：10以上の項目で影響が見られた。とくに、生活に関して居住方法の相違が影響したと考えられる項目が多かった。それは、生活時間、生活と大学生活に対する満足感、友人関係、生活の不安、親子関係、食生活であった。文化については、余暇の過ごし方と嗜好品の利用状況に違いが見られた。消費では、月平均の支出額が異なった。意識については、人生の目標と地域への愛着で異なった考え方が現れた。
- 5) 生活への満足感が説明要因と考えられる結果：生活に関する項目では影響が見られ、生活と大学生活への満足感についてはとくに違いが見られた。その他、生活の不安、親子関係でも異なっていた。身体では、心身の状態、意識については、将来、自己評価、就職観、生活志向、地域への愛着、余暇の希望する過ごし方で相違が現れた。
- 6) 大学生活への満足感が説明要因と考えられる結果：生活では、大学生活への満足感、友人関係に違いが見られ、心身の状態へも影響していた。意識については、将来、自己評価、就職観、ゆとり時間の使い方において、大学生活への満足感との関わりが明らかになった。

引用文献

- 1) 西迫貴美代・坂上ちえ子：「鹿児島における若年層の生活文化調査（第2報）大学生の生活と文化に関する意識と実態調査」，鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報，第35号（2004）
- 2) 大学生が勤勉志向に、6年前より「学業重視」－日本教育社会学会発表，
<http://www.asahi.com/national/update/0913/002.html>
- 3) 溝上慎一：『現代大学生論－ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる』，日本放送協会，12-34（2004）

- 4) 辻新六・有馬昌宏:『アンケート調査の方法－実践ノウハウとパソコン支援』, 朝倉書店, 160-171 (2002)
- 5) 全国大学生生活共同組合連合会:『第32回学生の消費生活に関する実態調査結果』, (1996)
- 6) 武内清編・岩田弘三:『キャンパスライフの今』 アルバイトの戦後社会小史, 玉川大学出版部, 242-269 (2003)
- 7) 中里至正他編:『自己理解のための青年心理学』, 八千代出版, 69-73 (2004)
- 8) 沼山博編著:『思春期・青年期と向き合う人のための心理学』, 中央法規, 57-62 (2004)
- 9) Coleman, J. and Hendry, L. 白井利明他訳: The Nature of Adolescence, 『青年期の本質』, ミネルヴァ書房, 188-189, 260-270 (2003)
- 10) NHK放送文化研究所編:『現代日本人の意識構造 [第五版]』, 日本放送出版会, 153-158 (2000)
- 11) 白井利明:『大人へのなりかた－青年心理学の視点から』, 新日本出版, 68-76 (2003)
- 12) ベネッセコーポレーション:『モノグラム・高校生VOL.53』
- 13) 警察庁編:『平成13年版警察白書』, 財務省印刷局, (2001)
- 14) 総理府統計局調査部労働統計課:『家族形成段階別の生活行動』, 53-55 (1979)
- 15) くもん子ども研究所:『子どもたちの子ども観・大人観アンケート調査』, (2002)
- 16) 前田清:『中学生の自覚症状と生活習慣』, 小児保健研究, No.61, Vol.5, 715-722 (2002)
- 17) 高田利武:『青年の自己概念形成と社会的比較』, 教育心理学研究, Vol.41, 339-348 (1993)